

探究学習の根っ子には「遊び」がある 竹内薫	2
言葉の池をつなぐ 堀江敏幸	4
「モナ・リザ」で論理的思考? 秋田麻早子	6
「アセチルコリン」の響き 永田紅	8

特集：新課程のお困り大解決！

お困り① 新課程の授業をさらに工夫したい

何をどう比べるか? 塗田佳枝	12
生徒と「話す・聞く」授業を楽しく活発に行うために 山口正澄	15
現・古・漢を季節の事柄で貫く「言語文化」の授業 澤田浩文	18
生徒の負担を軽減し、主体性を引き出す工夫 石原雅子	21

お困り② 必修科目の時間が足りなかった

帯単元を利用して「話すこと・聞くこと」の力を伸ばそう! 谷頭和希	24
文学の扉を開いたその先へ 高草真知子	27
指導の定着を評価しながら進める「書くこと」の授業 赤松幸紀	30

お困り③ 授業の工夫でさまざまな教材を扱いたい

可能性を秘めた「文学国語」における評論教材 佐々木一天	33
「文学国語」のできる古典のおさらい 石鍋雄大	36
評論教材と文学教材をつなげて学ぶ「論理国語」の授業 栗原賢	39

【アンケート】新課程国語の実態調査 編集部	42
-----------------------	----

令和6年度用 大修館書店 新課程用国語教科書のご案内 中面カラーページ

連載	県立いまどき高校 国語科だより ... スルーできない気がするー	いのうえさきこ	46
	いま、高校生に読んでほしい本 ... 川内有緒『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』	内田 剛	49
	詩の教室へようこそ⑥..... 言葉を真ん中に置くようにして	和合亮一	50
	国語教師のための 古典文法指導講座⑪..... 「ぞ」「なむ」「こそ」の違い	大倉 浩	54
	 紫式部にファンレターを書こう⑧		
	コトバのひきだし⑪..... 「アジづくし定食」はアジづくめ?	関根健一	56
	青山あり! 中国祠墓紀行⑧... 朱然墓(安徽省馬鞍山市)	平井 徹	58

コーナー	新刊紹介..... 鷗外「舞姫」徹底解説	48
	えつらん室..... 鷗外「舞姫」徹底解説/[例解]現代レトリック事典/ 画数が夥しい漢字121/変動する総合・探究学習	60
	国語のNews & Topics	62

探究学習の根っ子には「遊び」がある

たけうち
竹内 薫 かおる

一九六〇（昭和三五）年生まれ。
科学作家。科学に関する評論や
エッセイに加え、小説なども手
がける。著書に『99・9％は仮
説』『アバウトアインシュタイン
70のミステリー』などがある。

「探究」とはなんでしょう。それを考えるには、反対語を頭に思い浮かべるのが一番。探究の反対語は「暗記」です。変化し続ける社会情勢の中において、探究と暗記という二つの行為が反対の意味を持つようになってきたのです。

なぜ、探究と暗記が反対の意味を持つようになったのかと言えば、第四次産業革命が進行しつつあり、とりわけ人工知能（AI）が台頭し、これまで人間がやってきた仕事を受け持つようになったからです。AIは「暗記」が得意中の得意。世界一、暗記力がある人間よりも、AIのほうがたくさん正確に暗記できます。

でも、いまのAIには「自我」（言い換えると、意識や心）がありません。だからAIは探究が苦手なのです。探究とは、自分で考え、深く追究することを意味しますが、そもそも自我を持たないAIは、命令された計算をやっているに過ぎないのです。

り、暗記型の仕事ではなく、探究型の仕事に就けばいいだけの話ではないのか。そのためには学校にいるときから探究型の発想法や行動に慣れる必要がある。

でも、これまでずっと暗記型の授業を続けてきた先生や生徒のみなさんに、「はい、今日から探究型の授業をしましょう」と言っても、すぐには切り替えられませんよね。

私はここ7年ほど、探究型の授業を実践してきました。自分でフリースクールを設立し、現場で試行錯誤を重ねてきたのです。そこで、ここで探究型の授業について、私なりのコツを書いてみたいと思います。と言っても、そんなに難しいことはありません。

まず第一に、暗記をゼロにして、何も覚えなくてもいい、ということではありません。探究学習をする場合も、基礎となる知識は必要です。基本的な漢字が書けたり、百人一首を覚えたりして、悪いわけがありません。最低限の暗記はしてもいいのです。

次に、誰しも子供の頃は、いっぱい遊んだはずですが、その遊び心を思い出してみても、ということ。探究心は遊び心に通ずるところがあります。私はたくさん取材を通じて知りましたが、探究心旺盛なノーベル賞受賞者の多くは、子供の心のまま大人になり、学問

の世界で真剣に遊び続けている人々なのです。

ええと、趣味で好きなことをしているときは、強制されなくても、自然と楽しく学びますよね？ あるいは、試験前に急に好きな小説を読みたくなったり、ゲームをやりたくなったりしたことはありませんか？ それこそが探究なのです。

これまでの窮屈な授業を少しずつ変えていって、みんなが楽しく遊んでいるような雰囲気になったときこそ、みなさんは探究型の授業に移行できたのだと私は思います。

私の授業では、生徒を5〜8名のグループに分けて、論理パズルの解き方を発表してもらったり、ルービックキューブで競ったりしますが、哲学や科学の文章の意味をみんなで「解読」することもあります。

みんなが楽しく笑いながら文章の意味を考え、自由に意見を述べ合い、面白い創作を発表できたら、それは立派な探究授業だと言えるでしょう。

これまで勉強が苦しかったのは、意味のない暗記が多かったせい。でもこれからは、遊びの延長線上にある探究で勉強も楽しくなる。そう考えれば、AIの台頭は、決して恐ろしいことではなく、むしろ歓迎すべき変化だと思うのです。

「探究する力」

AIの台頭など、目まぐるしく変化する現代社会。そこで生き残るために必要なものは自ら考え、「探究」する力だ——新時代を生きる生徒への熱く優しいメッセージ。『新編 論理国語』（論国706）



言葉の池をつなぐ

ほりえ としゆき
堀江敏幸

早稲田大学文学学術院教授。小説家、フランス文学者。岐阜県生まれ。『おぼろばん』で三島由紀夫賞、「熊の敷石」で芥川賞など、数々の賞を受賞。著書に『雪沼とその周辺』『坂を見あげて』など。

言葉で表現できないからこそ存在価値のある分野の作品に接したとき、湧きあがってくる想いを野放しにしないで、なんとか心のうちにとどめておきたいと考えるのは、ごくふつうのことである。たとえば一枚の絵の前に立って、描かれている対象をひたすら見つめ、そこから漂ってくる色彩の香りに身をゆだねて、二次元の音楽に耳を傾ける。なにがその絵を絵としてあらしめているのかを厳しく考えなくても、そこで味わった感覚を忘れたくない、なんとか記憶にとどめたいと願う心の動きが大切なのだ。

ただし、記憶にとどめる器はふたつある。ひとつは直接的な身体感覚をともしなう記憶。もうひとつはそこから少し距離を置いて選り取った言葉。前者は一種の触媒と言ってもいい。あとから出会ったべつの作品が過去の記憶の一部と化学反応を起こし、眼前の絵に対して抱きつつある想いと二重写しになる。すると、以

前は気づかなかった部分が鮮明に見えてきて、よみがえってきた絵のどこに惹かれていたのかを自問する貴重な機会となるだろう。体験はこうして生き直され、来るべき反応に備えて貯蔵される。

重要なのは、自分のなかにという点である。いくら反芻しても、留め置かれた個人の体験をそのままの形で外に出し、他者にぶつけることはできない。当然ながら、それを伝えるには、どうしても言葉に頼るしかない。言葉を必要としない作品のすばらしさを他者と共有するために言葉を用いるというのはなんとも大きな矛盾だが、その矛盾を乗り越えなければ伝達も共有も継承も不可能になってしまう。

それだけではない。これはよかった、あれはよかったと相槌と同意に近い感想を述べあい、互いの印象を肯定しあうことに留まっていたら、どこがどうよかったのか明瞭にならないだろう。もちろん対話をつづ

けているうち、ふと相手が口にしたひとことで、不意に視野が開けることもある。小さな、わずかな言葉が、受け手にとっては生涯忘れられない決定的な指標にもなりうるのだが、口にした当人は、単なる思いつきであって十分に考え抜いた表現ではないと言うかもしれない。たとえそれが本当であっても、寸評の切れ味と即効性は、どれだけの言葉を体内に寝かせてきたのかによって、さらには言葉と言葉をつなぐ未発見の経路をどれだけ内蔵しているかによって効き目がちがってくる。無意識の発言であっても、いや、無意識の発言だからこそ、言語化という過程への向き合い方が露わになるのだ。人に伝え得たひとことは、結局、自分のために時間をかけて育ててきた思考のかけらなのである。

とすれば、絵画や音楽作品についての想いを言葉で他者に伝えることと、言葉で書かれた小説や詩歌などから得た感動やつまずきを語ることとのあいだに、本質的な差はなくなってくる。なぜそのような言葉で語られなければならないのかを考えることは、すぐに解き明かせない感情を辛抱強く煮詰めて言葉に変える作業と深く結びついている。

体験はそのつど身体に染みこんで、小さな池をつく

る。池はいくつあってもいい。やがてその水を汲み出すための言葉が縁に添えられる。読書とは、こうした体験と感覚の池を自分のなかにいくつもこしらえていく作業である。ただ、それだけでは足りない。池と池を水路でつなげなければならない。最初は運河になり、それが自然な川のようになるまでには、ながい時間がかかる。急がずあわてず、体のいい時間短縮と効率の誘惑に屈することなく、点と点を結ぶ流れができたあとも、周りに取り残された池に対する注視を怠らないことが望ましい。川がゆるやかに蛇行し、湾曲部分が土砂の堆積で分離されて三日月湖ができて、最初から点在していた池とはまったく異なる力がそこに宿っている可能性を棄ててはならないだろう。

口頭でなにげないひとことを発する土台は、こんなふうに徐々に整備される。自分の感覚が言葉として共有されることがわかると、今度は書くことへの通路が開かれる。書くこともまた、池と池の連結を目指す息の長い作業であり、それが読むことをさらに豊かにしていく。この幸福な循環を裁ち切ってはならない。本を読み、読んで書き、また読んで言葉と対話した想いを人に伝えよう。際限のないこの沃野に身を委ねる喜びが、自分だけのものではならないのだから。

「負の座標に向かって」

単色でありながら単一の色ではない、真つ青な空。青空に覚えた不安の正体に考えをめぐらせる、第二部冒頭単元の随想。〔文学国語〕〔文国 704〕



「モナ・リザ」で論理的思考？

あきた まさこ
秋田麻早子

一九七六（昭和五二）年生まれ。
美術史研究家、執筆活動や講座の
開催をおして、人々が自分の言
葉で芸術や美について語れるよ
う、絵を見る技術を広める。著書
に「絵を見る技術」などがある。

「論理国語」になぜ絵画の見方が出てくるのかと、疑問に思った人も多いでしょう。絵画の話になると、感覚的なものだと思います。論理的な思考は言葉や数式で行うもので、直観的に把握する絵画の世界とは相容れないものだと思うかもしれません。また、芸術作品について理屈っぽい話をするのは野暮だと感じるかもしれません。

では「論理国語」で「絵を見る技術」を取り上げるねらいはどこにあるのでしょうか。まず、絵画に限らず図版一般から情報を抽出する方法を学ぶこと、そして、思考の枠組みについて学び、ものの見方を広げるということも、ねらいとして考えられるのではないのでしょうか。ひとつ目のねらいはともかく、あとのねらいはすぐにはピンと来ないかもしれません。

どうということなのか、有名な絵を例に考えてみましょう。レオナルド・ダ・ヴィンチ作「モナ・リザ」と

いう絵があります。その絵に対し、あなたはどんなことを感じ、思い、考えますか？ また、他の人の意見を聞いたとき、どんなことを考えましたか？

ある人は「世界一有名な絵」、別の人は「ルネサンス時代の傑作」と言うかもしれません。また、「暗い」「怖い」「不気味」と言う人も、「売ったら高そう」と言う人も出てくるでしょう。

これらは全て違う意見ですが、ちよつと考えてみると、それぞれ違う観点で見ているのだと分かります。言い換えると、違う枠組みで見ているのです。

最初の意見は「モナ・リザ」が歴史的・社会的にどのようなポジションにあるか、という枠組みで見えていて、次は歴史的・技術的枠組みで見えています。「暗い」「怖い」「不気味」は、絵の色合いや人物の表情などに対する感想で、造形的・図像的な枠組みを通して感じられたことです。そして最後は、金銭に交換可能な価値

という枠組みで見えているということが分かります。

共感するかどうかは別として、各々がどんな枠組みを通して見ているかが分かれば、それぞれの意見を理解することが可能になるでしょう。ここに、思考の枠組みを学び、見方を広げるヒントがありそうです。

「絵を見る技術」では、絵から情報を読み取るための基本的な枠組みをいくつか紹介しています。漫然と見ているとき、人は意外なほどいろんな情報を見落としています。しかし、見るための枠組みが複数あると知っていれば、より多くの情報を絵から抽出することができます。そして自分がどういう枠組みで見ているかを客観視し、見方を変えたいときは意識的に別の枠組みで見ることができそうです。

一方で、感覚的な見方も大事にしたいと思うのも当然です。感覚的な見方とは一人の人間が余計なことを考えず、自分の感覚を総動員し、絵を全体として受け止めようとするのだと思います。この見方の問題は、どんな視点で見ているのか不明瞭になりがちで、自分と他者の感想が違っていたら、自分はズレているんじゃないかと少し不安になったりすることです。

そんなときこそ、自分の感覚を守り育むために、論理的に見る技術が大事になると思います。

論理的な見方の良さは、「分けて見る」ことにあります。絵がどう描かれているのか、何が描かれているのか、なぜ描かれたのか、といったことを分けて見る、そして、自分の見方と人の見方を分けて見る、ということです。

違う意見に遭遇したときは、その人はどういう枠組みで見ているのか、と考えてみることです。あわせて、自分はどこに着眼しているのか、どういう枠組みで見ているのか分析してみるのです。その過程で漠然とした不安の正体が分かり、それを解消する道筋も見えてくるのではないのでしょうか。

感覚的と思われることの中にも論理的な側面はあり、逆もしかりです。むしろ補完しあって高め合う性質のものでしょう。

教室は、先生や他の人たちの意見に触れる機会にもなり、そのような訓練の場としてびつたりだと思えます。その場に多様性があるほど、学ぶチャンスです。違う意見が出るほど、互いに新しい枠組みを獲得し、それだけ見方を広げることができるからです。そして同時に、自分だけの感覚・意見というものがよりはっきりと浮かび上がってくるはず。皆さんがそれを大切に温めていけることを願っています。

「絵を見る技術」

絵の造形的な特徴を見るポイントを豊富な事例をとおして紹介。漠然と「見る」のではなく、しっかりと「観察」することの大切さを説く。

（『論理国語』（論国 705））



「アセチルコリン」の響き

ながた
永田 紅

歌人、細胞生物学研究者。京都大学特任助教。父の永田和宏、母の河野裕子、兄の永田淳も歌人。歌集に『日輪』『春の顕微鏡』など。

短歌を作り始めたのは、中学に入る前の春休みだった。二歳年上の兄が、なぜか「俺、歌を作る」と言い出したのにくっついて、私も始めた。両親が歌人なので、小さなころから短歌や歌集は身近なものだったが、それ以前に実際に作ったのは、小学校の宿題の一首くらいのものであった。

兄とふたり、父が主宰していた短歌会に入会した。毎月送られてくる雑誌の最後のページには原稿用紙が綴じ込まれていて、これに十首を書いて選者に送る。ミシン目を切り離すときのちよつとわくわくする感じ、そして自分の歌の何首かが活字になって誌上に載ったときのうれしさが、作歌の原点だろう。

何でもかんでも、指折り五七五七七に乘せていった。新しい表現手段を得ると、それまで見えていなかったものが見え始める。歌の題材にならないかなと、窓を流れる雨滴の様子、電車の風圧で揺れる沿線のススキ、

陽に透ける木樅の葉^{むくげ}っぱを見つめた。たぶん、歌を作ろうと思わなければ、漠然と視界を過ぎていくだけの景だろう。歌一首を作るだけで、記憶に付箋がつく。

実感したのは、言葉は「逃げる」ということだった。湯舟や布団の中でいいフレーズを思いつき、あとで一首に仕上げようと思っても、お風呂を出たとき、翌朝目覚めたときには、その言葉の組み合わせは跡形もなく消えている。二度と再現できない口惜しさ。

だから、何か新しいフレーズを思いつくと、授業中でもプリントの裏に書き留めるようにした。言葉の断片を自分の内に溜め込むことは、表現の基礎体力になる。そしてまた、人の詩歌の断片を自分の内に溜め込むことも、世界をこの上なく面白く見せてくれる。

定期的に締切りがあるというのも、案外大事なことだった。自分は何かすばらしいものを表現できるんじゃないか、という若い漠然とした思いや情熱、衝迫感

があったとしても、表現手段と締切りがなければ、せっかくの内面も形を取り得ない。

中学、高校のあいだ、そんなふうに毎月短歌を送り続け、浪人生に。人生うまくいっていないときのほうが何かを表現したくなるもので、浪人のときこそ歌を作りたい気持ちが強かったが、そこは一年間我慢。晴れて大学生となり、二十一歳のときに応募して新人賞を受賞した三十首の一連に入っていたのが、『新編文学国語』に掲載していただいたこの一首である。

今日君と目が合いました指先にアセチルコリンが溜まる気がした 『日輪』 永田 紅

「アセチルコリン」は神経伝達物質である。生命科学をやりたいくて農学部に進んだので、『細胞の分子生物学』などの教科書を読み、出会った言葉だっただろうか。ドキッと胸に迫るものがあるとき、私は手のひらから指先へかけて、何か緊張のような感覚が走る。「君」と目が合ったときのそのような感じを、指の先に神経伝達物質が溜まるようだ、と表現したくなったのだった。本当にアセチルコリンが溜まるのかどうかは知らない。科学的根拠のある歌ではない。ただ、アセチルコリンという言葉の響きに惹かれ、心の動きに伴って神経細胞間のシナプスに物質が放出されるイメ

ージを体感したような気がして、生まれた歌だった。理解してもらえないかもしれない専門用語も、詩の一部として取り入れたい気持ちもあった。

「うれしい」「悲しい」という一般的な形容詞を使わずに、それらをどう表現するか。感情は、はじめからはっきりと分かりやすい形で存在するものばかりではない。むしろ、表現してゆく中で、輪郭をもってくるもののほうが多い。「悲しい」を表現した一首ができて、その下の層にはさらに別の悲しみがある。剥がしてゆくと、表現してゆくと、新しい感情の相が現れる。表現を耕しながら、開拓しながら、自分の心に出会ってゆくのだ。

短歌は飛躍と省略の文芸なので、解釈が難しいことも多い。本来、作品の読み方に正解、不正解はないはずだが、試験に出るものであれば、正誤が設定されるのも致し方ない。けれど、気晴らしに教科書をばらばらと眺めるときには、「うまく説明できないけど、何かいいな」「意味はわからなくてもしびれる」という緩さや無責任さで、楽しんでしまうのが一番だと思う。そして、教科書の一首をきっかけに、自分でも作ってみようかなと思ってもらえたなら、作者冥利に尽きる。十代の歌は、十代のときにしか作れないのだから。

単元「恋のうた」

中島みゆきから「長恨歌」まで。現代から近代、古典へと時代を遡りながら、恋する心をうたう古今の詩歌を集めた単元。

〔新編 文学国語〕(文国 705)



こんな「お困り」、感じていませんか？

お困り① 新課程の授業をさらに工夫したい

- ・比べ読みって、どう扱えばいいの？〔現代の国語〕→ p.12
- ・「話す・聞く」の授業をもっと活発にするには？〔現代の国語〕→ p.15
- ・現・古・漢をうまく融合して扱う方法は？〔言語文化〕→ p.18
- ・「文学国語」の「書くこと」の授業、どんな風に進めていったらよい？
〔文学国語〕→ p.21

お困り② 必修科目の時間が足りなかった

- ・「現代の国語」での「話すこと・聞くこと」の定着、大丈夫？〔論理国語〕→ p.24
- ・小説や韻文をどうやって教える？「言語文化」で文学まで手が回らなかった…
〔文学国語〕→ p.27
- ・「現代の国語」での「書くこと」の定着、大丈夫？〔論理国語〕→ p.30

お困り③ 授業の工夫でさまざまな教材を扱いたい

- ・「文学国語」では、評論教材をどのように扱ったらよい？〔文学国語〕→ p.33
- ・「古典探究」を履修しないと、古文・漢文を扱えない？〔文学国語〕→ p.36
- ・文学教材を活用して「論理国語」の読みを深めるには？〔論理国語〕→ p.39



特集 新課程のお困り大解決！

2022年度から新課程の必修科目の授業が開始され、いよいよ2023年度からは選択科目の授業が始まります。

「比べ読みってどう扱えばいいの？」「必修科目で文学教材を扱う時間が足りなかった！」など、新課程の国語授業について、高校現場の先生方から多く寄せられた疑問やお困りの声を受けて、解決のヒントとなる授業実践案をご紹介します。



【アンケート】新課程国語の実態調査

「手探りの状態で新課程の授業をスタートしたけれど、ほかの学校ではどのように進めているのだろう？」と、気にされている先生も多いのではないのでしょうか。小誌では、新課程に関するアンケートを実施し、集計結果を掲載しています。新課程の授業の組み立てやカリキュラム作成のご参考にいただければ幸いです。→ p.42

何をどう比べるか？

ぬりた よしえ
塗田佳枝

筑波大学附属
坂戸高等学校教諭

比べ読みって、どう扱えばいいの？



■はじめに

「比べ読み」は昨春から始まった新課程でも、キーワードの一つに数えられるものです。では、何をどのように比べたらよいのでしょうか。「現代の国語」の「読むこと」で「精査・解釈」「学習指導要領C(1)イ」は「考えの形成・共有」と一体化した形で示されていますが、特に前半部は文章の内容や形式に着目して読むことを通して書き手の意図や表現の効果を考える、とまとめられます。ここで比べ読みの出番です。文章の内容や形式の特徴は、一つの文章を読むより複数の文章を比較するほうが、より明らかになるからです。

ただ二、三の教材を与え、「比較するように」と漠然

と指示しても、戸惑う生徒が多いかもしれません。特に最初のうちは、比較するための観点を教員が提示する必要があります。最も大きな観点は「共通点と相違点」になります。教室の状況に応じて設定すると良いでしょう。以下では『現代の国語』（現国706）の教材を用いて、三パターンのアイデアをご紹介します。

■案①…同じテーマで論点が違うもの『空気を読む』

（香山リカ）×『個人』から『分人』へ（平野啓一郎）

本教科書の第9単元は「複数の文章を比較し、共通点や相違点をとらえる」ことを目標とする、比べ読みの単元になっています。「ウォームアップ」には読む際のポイントやベン図による整理のしかたが示されており、単元の導入に使えます。

■案②…全く同じテーマで筆者が異なるもの『家守綺

譚』評「どれくらい」の不思議まで人は許せるのか」（小川洋子）×「異界のものたちがおっとり」と楽しげに」（川上弘美）

これらは第6単元の「魅力的な紹介文を書く」の参考資料ですが、ほぼ同世代の女性小説家が同じ作品を紹介しているため比べ読みの教材にすることもできます。作品について、前者は「どれくらいまで人は許せるのか」という不思議の行けるところまで行ってみた小説、後者は自然の「わからない部分を怪異の姿になぞらえて語」る物語の系譜と評していますが、紹介の重点は、読者はどのような姿勢で読めばよいか、作者はどのような態度で書いているかと、それぞれ異なります。

まず個別に読む段階では、概要をどう紹介しているか、作品の何を取り上げているか等に注目しながら文章の構成を確認し、表現の特徴と効果を整理します。その上で両者の共通点と相違点をまとめてみると、各文章の特徴がより明らかになります。作品を読んだことがある生徒とない生徒がいると思いますが、各文章から作品に対してどのような印象を抱くかを話し合わせても良いでしょう。多様な表現の可能性に気づくことは、生徒自身のものの見方や感じ方を深めることにもつながります。



▲『現代の国語』（現国706）
p.146 「文章を比較して読む」

単元に置かれた二つの教材は、対人関係と自己のありかたを扱っている点は共通しています。しかし前者は精神科医の立場から「空気を読む」関係の中で自己を築く現代人に警鐘を鳴らしているのに対し、後者は小説家が自身の執筆活動で限界を感じた「個人」という概念から「分人」へのシフトを提唱している点で異なります。「学習のポイント」は両教材共通となっております。比較の観点が示されているため、それぞれを通読し、主張と段落構成を簡単に確認した後で比べ読みに無理なく移行できます。なお主張の違いの整理（ポイント③）には、ウォームアップのようなベン図や表を使って視覚化すると理解しやすくなります。

お困り① 新課程の授業をさらに工夫したい

生徒と「話す・聞く」授業を 楽しく活発に行うために

「話す・聞く」の授業をもっと活発にするには？



「現代の国語」では「話すこと・聞くこと」の領域に20〜30単位時間が配当され、身につけさせたい力に沿って計画的に指導していくが、せっかく行うのだから生徒も教師も楽しく活発に授業を展開したい。「読む」「書く」領域の指導に比べると、これまでの授業の経験から負担や大変さが懸念される面はあるが、生徒の実態と学習のねらいに沿った方法を取り入れられれば、指導上のハードルは決して高いものではない。

その参考例として、定時制課程の本校で、大修館書店の『新編 現代の国語』（現国707）を使い、「話す・聞く」に関わる授業で手応えがあった実践について、以下、四点に分けて記す。

■案③…テキストタイプによって伝えかたが異なるもの
「パン屋の手紙」（神幸紀・中村好文）×「インターネット時代の音楽産業」（吉見俊哉）

最後は、テーマもテキストタイプも異なる文章について、筆者が自らのメッセージ（主張）を効果的に伝えるために、どのような表現方法を選択しているかという観点で比較する案です。勤務校の国際バカロレア科目「言語と文学」の授業では、文学以外の様々なテキストを比較する際、ルネ・ホッブスの「五つのクリティカルな問い」（注）を参考にした以下の観点を使っています。

- ・ 基本情報：…テキストタイプ、筆者、執筆年など
 - ・ 概要・構成：…意味段落の内容の確認
 - ・ 筆者のメッセージ：…何を伝えるテキストか
 - ・ 表現の特徴と効果、受け手の印象：…メッセージを伝えるためにどのような選択がなされているか
- ※異なる新聞社の記事等の比較では、「筆者のメッセージ」に「どんな価値観・視点が示されているか」「示されていないものは何か」も加えている。

「現代の国語」の教科書には論理的な文章だけでなく、実用的な文章も数多く掲載されています。今回の手紙文

は自らが営むパン屋の建物の設計を依頼する文章であり、題材の選択や構成、表現等に、事務的な依頼とは異なる工夫が見られます。それに対して評論では、統計資料を用いながらネット社会化によってオーディエンスの音楽世界への参加形式が変わったという主張を展開しています。右に示した観点のうち、特に構成や表現の特徴とその効果に着目して読み比べることで、テキストタイプ特有の表現方法をより理解することができそうです。

■おわりに

新課程では「言葉による見方・考え方を働かせ」ることが重視されています。その手段として比べ読みは有効ではあるものの、ペアやグループ等の形態にして個々の生徒が主体的に読む場を作ることも重要になってきます。今回お示したアイデア以外にも教材と観点の様々な組み合わせが考えられますが、最終的には生徒自身が適切な比較の観点を設定し、読み比べることができるよう指導していきたいものです。

〔注〕ルネ・ホッ布斯（森本洋介ほか監訳）『デジタル時代のメディア・リテラシー教育 中高生の日常のメディアと授業の融合』東京学芸大学出版会、二〇一五年、六九〜七一頁

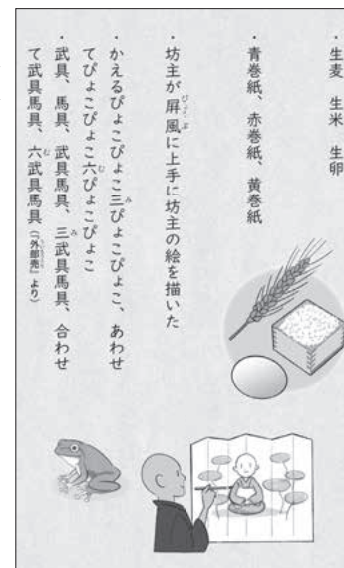
■早口言葉で授業開きをする

本校での「現代の国語」は、単元1にある「ことばの準備体操」の早口言葉から始めた。まずは「人前で発声すること」がねらいであったが、アイスブレイクの効果も生まれた。授業者が上手に早口言葉を言える必要はなく、むしろ、つかえたり言い間違えたりすることで教室内の緊張感がほぐれ、生徒に「この教室では何か失敗しても大丈夫だ」という感覚をもたせることにもつながるだろう。実際に私自身もうまく言えなかったが、かえって生徒から親近感をもってもらえたと思っている。

次に、指導書付属資料の音声データを手本として流し、それに続けて早口言葉を練習させた。すらすら言える生徒はかなり得意げな様子で、周囲の生徒に早口言葉を披露していた。音読自体に苦手意識のある生徒や場面緘黙・吃音を抱える生徒への配慮として、一人ずつではなく

やまぐちまさずみ
山口正澄

東京都立小台橋高等学校教諭



▲『新編 現代の国語』(現国707) p.20
「ことばの準備体操」

ラス全体やグループ単位で言わせてもよいだろう。お互いに上手に言えるかをペアワークで確認させると楽しそうに盛り上がりつつあった。発声に不安そうな者も、生徒同士ならば小声でも参加できていた。さらに教科書掲載以外の早口言葉をネット検索させ、それをクラス全体で言うことで、教室内がより活性化化した。

■聞き間違いやすい言葉を考えて紹介し合う

単元2にある「伝わるように話そう」では、伝わりやすい話し方や、相手への聞きやすさを意識して話す学習を行い、その授業の中で、聞き間違いやすい言葉への理解を深める次の活動を取り入れた。

まずは、同音異義語を使って創作した短文を紹介し

生徒が協働してゲーム性を楽しみながら活動に取り組めた。一列の単位でチームを作り、教科書は読ませずに先頭の生徒にだけ音声データによるメッセージを聞かせて、後ろの生徒へ順々に伝達し、最後尾の生徒で答え合わせをする。

実際の授業では、速く伝えようとして数値の情報を間違えた生徒や、正確さを求めてメモをとるのに時間をかけすぎた生徒がいて、それぞれの課題を各生徒に考えさせることもできた。

この問題は音声データにもう一題別問が用意されているので、初回にうまく伝達しきれなかったチームにも二回目で挽回する機会を設けられた。

■場面に応じた表現を選ぶ

単元6の「伝え合いのレッスン」にある「対話のレッスン」では、教科書でポイントに示されたアサーションも意識させて、場面に応じた表現を選ぶ言語活動を行った。その際に、演じることもできそうならば、話し方、表情、身振りといった要素も考慮して発言するように指示したところ、演じることに興味をもって取り組む生徒が複数いて盛り上がりつつあった。本校の授業で、対人交流に不安を覚える生徒に「黙っていても相手には伝わらないの

合った。短文例として、「さんか…大会に参加する。／鉄が酸化する。」「ゆうかい…子供を誘拐する。／氷が融解する。」「たいとう…台東区に行く。／対等な立場にいる。／敵が台頭する。」などが出た。さらに、音が似ている漢語を教科書の掲載例以外に考えて紹介し合った。生徒が出した例には、「鉛筆／旋律」「連盟／延命」「太陽／対応」「引退／人体」「乾燥／干涉」「愛憎／改造」などがあつた。生徒自身に考えさせたものを用いた活動だったので、ワイワイと楽しそうに紹介し合っていた。

授業後に感じた課題として、これらを生徒相互で漢字書き取りのリスニング問題のように出させて解説までさせていたら、理解が一層深まったのではと思われる。また、この授業の数か月後に、学習の振り返りを兼ねて、「きしやがきしやできしやにきしやする。」に正しく漢字をあてるように発問したところ、あるクラスでは「記者が汽車で貴社に帰社する。」と即答できた一名が出て、周囲の称賛を集めた。この発問は、どの学校でも楽しく取り組めるだろう。

■聞き取りメッセージをリレーする

単元4の「聞く力を育む」では、「聞き取りのレッスン」にあるメッセージをリレー形式で伝える練習から行い、

で適切な言葉や態度が大切」と教えている点でも、このレッスンは有効であった。

次に、場面に応じた伝え合いの実用的な事例を紹介する。まず、「駅の非常ボタンが押されているため、現在、安全の確認を行っています。確認が取れるまで今しばらくお待ちください。」「安全の確認が取れましたため、まもなく運転を再開します。」を、より多くの人々に伝えるためにどう表現を工夫するかと尋ねる。しばらく考えさせてから「誰かが駅のSOSボタンを押したので、止まっています。ストップしています。電車の外は危険です。電車から出ないでください。」「安全なことがわかりましたので、もうすぐ電車が動きます。」を例示し、なぜこのような工夫が必要かを考えさせた。幼い子供や海外から来た人などが相手となる場面ならば、表現の工夫がさらに大切になることに気づかせ、多様性に配慮した社会のあり方まで考えさせることができた。

このように、「話す・聞く」領域の授業も、やり方次第で生徒の関心と学力をしつかりと向上できる。以上に記した学習と組み合わせ、一年間の学習計画上に、ミニインタビュやミニ討論会、さらにプレゼンテーション活動などを位置づけることで、「話す・聞く」ことの実践力を効果的かつ発展的に身につけさせたい。

現・古・漢を季節の事物で貫く 「言語文化」の授業

さわだ ひろふみ
澤田 浩文

長野県野沢北高等学校教諭

現・古・漢をうまく融合して扱う方法は？



■はじめに

学習指導要領「言語文化」の「読むこと」には、「上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深める」という文言がありますが、どのようにすればそのような授業が実現できるのか、迷われている先生も多いのではないのでしょうか。

そこで、学習者の「我が国の言語文化」に対する考えを深めるために、大修館書店『新編 言語文化』（言文706）の「詩歌の調べ」を用いた「現・古・漢」の比較による授業を提案します。

■教材の内容と探究の視点

「詩歌の調べ」では、四季に関わる現・古・漢の詩歌

が掲載されています。例えば、「秋のうた」には、「紅葉」を詠んだ和歌と漢詩があります。藤原定家の「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ」と、杜牧の「山行」です。和歌では「紅葉もなかりけり」と「紅葉」の不在が描かれているのに対して、漢詩では「霜葉紅於二月花」とあり、色のはっきりとした「紅葉」が目に見える形で描かれています。この事例だけで、日本と中国の違いを言い切れることはできません。しかし、これらの気づきをきっかけとして、各季節における事物の描写を探究することで、我が国の言語文化への理解を深めたり、言語文化の探究方法を学んだりすることができそうです。

■単元の目標と学習指導要領の指導事項

①季節の事物と関連する言葉の知識を深めること（知識及び技能(2)ア）

②作品の比較を通して、季節に関する言語文化に対して

自分の考えを持つこと（思考力、判断力、表現力等B(1)オ）

■単元計画の流れ

①「四季」の知識共有／調査対象の決定（1時間）

まずは、学習者の実生活に関わる「四季」の知識を他の生徒と共有します。その後、教科書から季節を選択し、そこにある事物を確認します。それらを参考に、調査す

る季節の事物を決めます。

②季節の事物を用いた作品の収集（2～3時間）

前時に決めた事物を用いた作品を収集します。その際、学習者には次の二つの観点から選択し、収集するように促します。

（1）時代別

（2）日本／中国／他の外国

※収集が難しい場合は、教員側で作品を提示します。【参考文献】の書籍・サイトが役立ちます。

③共通点・相違点の考察（2～3時間）

収集した作品を比較し、事物の用いられ方の共通点・相違点を考察します。例えば「紅葉」では、『古今和歌集』に22例（歌のみ、以下同じ）、『新古今和歌集』に21例掲載されており、前者では「秋下」の部立てに多かった和歌（13例）が、後者では「冬」（8例）にも見受けられるようになります。この変化を作品の内容を押さえながら考察する活動などが考えられます。

④まとめ・他者への発信（2～3時間）

学習のまとめとして、学んだことを形にします。その際、次のようなまとめ方を示し、学習者を選択するように促します。

（1）調査レポート



▲『新編 言語文化』（言文706）pp.142-143 「詩歌の調べ」（秋のうた）

(2) 詩歌の実作とその解説

いずれにせよ「言語文化」への認識の深まりが確認できる形で評価する必要があります。

■単元の評価

評価は「自己評価／他者評価」と「教員による評価」を「単元の目標」に則して行います。具体的には、目標①では「季節」の事物とそれに関する言葉との関係を理解することができる、目標②では「複数の作品から季節に関わる言葉を収集し、共通点・相違点の考察から、『我が国の言語文化』に対する自分の考えを深めることができる」等を基準として、ルーブリックを作成し、学習者と事前共有をして評価します。

■おわりに

今回の四季とは違いますが、「香り」をテーマに調査した生徒の感想を挙げ、まとめとします。

A 花橘の香りのお香をかぐと昔の日々を思い出すという表現が素敵だと思った。英人の「香水」でも似たことを言っていて、匂いは昔の人や現代の人でも記憶を呼ぶことができ、同じだったんだと改めて感じた。

B 暗い夜には花はおろか、色なんか見えるわけがない

が、作者は、香りは感じられるという。物事を一つの視点（花は見るものという考え）で見ずに、多方から見つめ、可能性を広げるところに、着眼点の良さを感じ、自分の生き方にも取り入れてみたいと感じた。

「言語文化」の授業では、Aの生徒のように自分と古典とのつながりから我が国の言語文化に誇りや共感する心をもったり、Bの生徒のように自分と古典との違いから自らを相対化して学んだりすることが求められます。そのためには、「現代と古典」「日本と外国」のように比較を通して学ぶことが一つの鍵になりそうです。異なる時代や地域で生まれた作品について、ある視点から比較をすることで、現・古・漢のつながりを実感することができるのではないかと思います。

【参考文献】

久保田淳(二〇三)『花のものが言う 四季のうた』岩波現代文庫
国立国語研究所「日本語歴史コーパス」<https://chrfninja.ac.jp/chj/>
(二〇一三年一月一八日確認)
吉海直人(二〇一六)『古典歳時記』角川選書
渡辺秀夫(一九五五)『詩歌の森 日本語のイメージ』大修館書店

お困り① 新課程の授業をさらに工夫したい

生徒の負担を軽減し、主体性を引き出す工夫

——「文学国語」の「書くこと」——

「文学国語」の「書くこと」の授業、どんな風に進めていったらよい？



■はじめに

「文学国語」における「書くこと」の授業では、読みの関心が得られる文学的な文章が書けるよう指導していくこととなります。心に留めておきたいのは、「読むこと」と「書くこと」の往還が重要だということです。

「読むこと」の指導では、題材選定、構成・表現上の工夫などにも着目させ、「筆者は、何をどのように書いているのか？」から、「自分ならば、何をどのように書くだろうか？」までを考える習慣を身に付けさせることが大切です。「書き手」としての自己を意識して「読むこと」と「書くこと」を行き来する中で、生徒は文学作品を「読み手」「書き手」双方の立場から捉えられるよ

いしはらまさこ
石原雅子

筑波大学大学院（博士後期課程）
元奈良学園中学校・高等学校教諭

うになり、批評する目も育っていきます。両領域の相乗的な関係性を踏まえ、「書くこと」を常に生徒の意識に上らせながら「読むこと」の指導を行うとよさそうです。

なお、文学的な文章を書くことは、生徒にとって心的負担が少なくありません。その一因は、論理的な文章と比べて自己開示的な側面が強いことです。消極的な態度をとる生徒がいても不思議ではありません。このような状況を乗り越えるためには、課題設定、交流の場づくり、支援のあり方、以上三つがカギになると考えられます。

■年度当初の課題設定

年度当初の「書くこと」の指導では、心的負担が生じにくい課題設定が重要です。また、書くことが得意な生徒には、書きがい、が保障され、苦手な生徒にも取っつきやすい内容でなければなりません。最終的に、生徒から「意外と書けるかも」「友達と比べると面白い」「もっ



▲『文学国語』(文国704) p.196
「書く」③構成を考えて書く」

と語彙力が欲しい」といった感想が出されれば成功です。まずはこのことを目標にされてはいかがでしょうか。課題例として「○○を比喻を用いて描写する」があげられます。シンプルですが、先述の目標達成に有効で、今後の学びにも繋がります。描写対象は何でもよいのですが、経験上、身近にいる動物がオススメです。具体性を持たせられますし、生徒が(負担にならない程度に)個性を発揮でき、楽しく和やかな交流が実現します。年度当初に限りませんが、「書くこと」に取り組ませる際には、参考資料として文学的な文章を複数提示し、「読むこと」から始めるのがよさそうです(大修館書店の『文学国語』(文国704)では、前単元の「読むこと」を踏まえたワークが設定されています。「名文案内」もぜひ活用ください)。「こんな風に文章を書きたい」「○○という言葉を使ってみよう」など、生徒が自分なりに「書くこと」の目標を持つために、先人の文章は欠かせません。なお、教師が生徒に交じって同じ課題に挑戦し、生徒とともに感想・批評を交流することを推奨します。適切な課題設定や支援のあり方を検討する上で、この作業は非常に有効です。さらに、教師が「書き仲間」として生徒に認知されれば、授業はより活性化し、ワクワクできる時間になるはずです。

■教師による支援
ここでは実際の授業場面に即して、支援のあり方について二つ取り上げてみます。

(1) 書き始められない生徒がいたら…
今回は、大修館書店『文学国語』(文国704)の「③構成を考えて書く」を例に説明します。ワーク2では「ある昼休みのできごと」を八〇〇字程度で書く活動が設定されています。「自分の体験でも、創作したできごとでもよい。書くことを決めて、…」という指示から、交流が盛り上がる予感がします。ただ、「書くことを決め」るのが、実は難しいのです。面白くて個性的な文章を書かなければ…!と肩に力が入り、一字も書けない生

■交流の場づくり

文学的な文章を書くことは簡単ではありませんが、交流の場を上手く設定することで、生徒は主体的に取り組むようになります。年度当初に「文章を書けば必ず他者が反応してくれる」という実感を持たせられるかどうか、その後の授業の行方に影響するように思います。

たとえば、文章をワークシートに記入後、そのシートを交換して生徒同士でコメントを記入し合う方法が有効です。コメントには必ず記名させ、責任感をもって丁寧に書くように促します。この方法の利点はおもに三つです。誰がどのようにコメントしてくれたのかが常に手元で確認できること、他者のコメントを踏まえてコメントできること(紙上討論の実現・評価の観点の獲得)、生徒の実態が把握しやすくなること、です。アナログな方法ですが、手渡す際のちょっとしたやりとりなどを含めて、生徒同士の関係づくりにも役立ちます(ワークシートがカラフルになるのも嬉しいそうです)。このとき、制限時間を設けると、生徒の集中力が格段に上がります。

信頼関係が構築されるに従って、褒める・共感するといった肯定的な内容に加えて、疑問点なども添えられるようになり、ときには教師も驚かされるような優れた考察や批評が、複数の生徒の協力によって生み出されます。

徒も出てくるかも知れません。

そこで、普段の昼休みの過ごし方をメモさせた後、何か一つを創作内容と置き換えるよう指示するのはいかがでしょうか。「購買に行ってパンを購入し、教室で友人たちと食べる」というメモがあるなら、購買の店員、パン、教室、友人たち、のいずれかを、ちょっと意外なものに変えるだけで面白くなります。個性は狙って出すものではなく、むしろ一定の条件が付されることににじみ出てきます。条件設定を上手く活用ください。

(2) 書き終えられなかった生徒がいたら…

全体で授業を振り返る際には、書き終えられなかった生徒の文章も取り上げられるとよいと思います。「○○が特に興味深かったので、この点についてもう少し教えてくれませんか?」といった質問をして、本人が補足できる機会を設け、「書きたかったのに書けなかった。でも、伝えることはできた!」という状況に到達させたいものです。「書くこと」に取り組むたび、それが成功体験として蓄積されていくことが、何よりも大切です。

■おわりに

「文学国語」の「書くこと」の授業は、可能性に満ちていると思います。生徒とともに楽しみな実践を重ねられ、知見を共有していただければ幸いです。

帯単元を利用して

「話すこと・聞くこと」の力を伸ばそう！

谷頭和希

森村学園中等部
・高等部教諭

「現代の国語」での「話すこと・聞くこと」の定着、大丈夫？



■はじめに

今年度から始まる高等学校国語の新しい教科で「論理国語」を採択している学校も多いでしょう。「論理国語」の指導領域は「読むこと」と「書くこと」とされていきますが、そのときに気になるのが「話すこと・聞くこと」の指導です。

というのも、高校一年生の必修科目である「現代の国語」で十分に「話すこと・聞くこと」の指導ができなかった場合や、「話すこと・聞くこと」の指導領域が十分に確保されている「国語表現」を学校として選択していない場合、高校二年生以降での「話すこと・聞くこと」の指導が手薄になる可能性があるからです。特に近年では

大学入試のあり方も多様化し、筆記試験だけではなく面接試験が必須となる場合も多い「総合型選抜」で受験をする生徒も増えていきます。そのような生徒にとって、「話すこと・聞くこと」の指導はきわめて重要になってきますし、それらの対策は「ことばの教育」を専門的に担う国語科の仕事でしょう。

では「論理国語」を採択している学校でもできる「話すこと・聞くこと」の指導は何かないでしょうか。もちろん、「論理国語」では「読むこと」「書くこと」を学びますから、その領域の力を伸ばす中心教材を邪魔しないような形で、「話すこと・聞くこと」の指導の方策を考えていきましょう。

さて、そこで提案したいのが「帯単元」の考え方です。齋藤(三三)によれば帯単元の定義は論者によってさまざまですが、ここでは「毎時間授業の冒頭10分

～15分を用いて継続的に同じ学習活動を繰り返し行う一つの単元とする学習活動」のことを「帯単元」と呼びたいと思います。

では、この帯単元の何がよいのでしょうか。その利点を三点にまとめました。

- ① 短時間での活動のため、本教材を邪魔しない
- ② 毎時間行うため、活動が習慣として定着しやすい
- ③ 活動が複数あることで生徒が授業に飽きない

以下、この三点を詳しく見ていきましょう。

① この帯単元は各授業の冒頭10～15分程度で行うため、本教材の取り扱いを邪魔することなく実践することができます。本教材を用いて「読むこと」や「書くこと」の力を伸ばしつつ、「話すこと・聞くこと」も行うことができるのです。

② 帯単元の最大の強みは反復性にあります。例えば、授業の中でスピーチを行ったとしても、それが年に一回だけであれば、話す力はなかなか身につけません。何度も繰り返し行うことによって始めてその力が身につくのです。この活動では毎授業で「話すこと・聞くこと」の活動を行うので、自然とその力がトレーニングされます。

③ 生徒は50分の授業時間で同じ活動を続けていると飽きてしまうもの。生徒の集中力を持続させるには、50

分のなかでさまざまな活動を組み合わせることが肝要です。この帯単元を実施することによって、本教材での活動とは異なる活動を授業の初めに挟むことができ、授業の活動に多様性が生まれます。

■帯単元の具体例

それでは、具体的に単元の提案をしてみましょう。提案するのは「相互にインタビュアー」という単元。クラスメートで二人組になり、テーマに基づいて相互にインタビュアーを行う活動です。

活動では、最初に二人組を作ります。このとき、毎回違うクラスメートとのインタビュアーをおして「話すこと・聞くこと」の力を深めるために、生徒たちに任意でグループを作らせないことが重要です。

次にインタビュアー内容を提示します。ここでは、大修館書店『新編 論理国語』（論国706）の「フォーカス自分を客観的に見つめよう」での活動を参考にしましょう。この教材では自分の人生について表にまとめ、それをもとに生徒相互でインタビュアーする活動が設定されています。国語の時間やホームルームの時間に作成しておき、それを活用するといでしょう。この教材ではインタビュアーする内容は「生徒の長所・短所」に限られています。この帯単元ではテーマを広く取り、「家族のこと」

お困り② 必修科目の時間が足りなかった

文学の扉を開いたその先へ

たかくさ まちこ
高草真知子

元東京成徳大学教授

小説や韻文をどうやって教える？

「言語文化」で文学まで手が回らなかった…

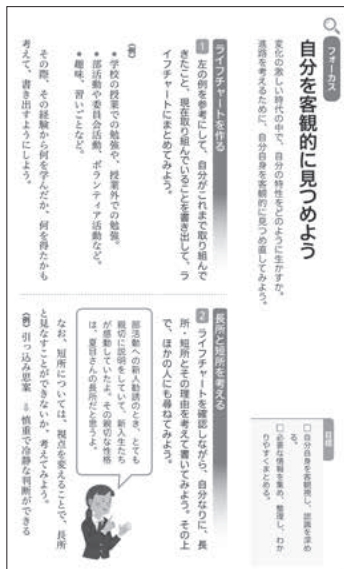


■「文学の扉を開こう」を使って基礎から学ぶ

いよいよ「文学国語」の授業が始まりましたね。「楽しみにワクワクしている」という先生も多いと思いますが、「小説は読むのは好きだけど、教えるのは苦手」「詩の授業は難しい」「短歌・俳句はやったことがない」という方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そこで、ここでは大修館書店『新編 文学国語』（文国705）の巻頭にある「文学の扉を開こう」を使った授業を提案したいと思います。「文学の扉を開こう」は、文学を読むときに押さえておきたいポイントを、図や具体例を用いて基礎から解説した単元です。

構成は次のようになっています。



▲『新編 論理国語』（論国706）
p.172「自分を客観的に見つめよう」

が、探究学習の際にも重要になる「問い」を作ることが日常的な活動の中で行うことができるのです。また、回答者側は質問に対して明確に答えることが求められます。「話すこと・聞くこと」の力を、毎回の簡単なインタビュで繰り返し行うことで伸ばしていくことができるのです。

齋藤（103）の実践にもあるように、帯単元の場合、学習のまとめを毎回行わなくても、その活動を繰り返すことによって生徒自身が望ましい質問の仕方や答え方を自発的に体得していきます。この活動を重ねてきたら、上手な質問の方法などについて教師側からレクチャーしてもよいでしょう。『新編 論理国語』の中には5W1Hに気をつけるなど、質問の仕方についての記述もありますので、それを参考にしてもよいでしょう。

■最後に

ここで示したのは一例です。工夫次第によってさまざまな活動を行うことができます。気になる方は、左の文献を参考にしてみてください。短時間での学習の蓄積で子どもたちに望ましい力をつけることができる「帯単元」方式の授業にトライしてみたいかがでしょうか。

【参考】齋藤隆彦（103）「帯単元学習」でつづける学力についての「考察」『神戸親和女子大学児童教育学研究』40:63-82。

① 文学的な文章とは？

② 場面設定を押さえる

③ 場面の展開を追う

④ 心情・情景描写を読み取る

⑤ 感動したことを共有する

⑥ 詩の構成と表現

⑦ 短歌・俳句の構成と表現

まず、①で、そもそも文学的な文章とは何かについて考えます。②では小説における5W1Hを押さえ、③で登場人物や時間の変化を追いかける、④で人物の心情をどう読み取るかを学びます。そして、⑤では、作品について話し合うときのテーマやヒントを示しています。

②～⑤では、例文として「羅生門」が使われています。「羅生門」は「言語文化」のほとんどの教科書に載っている作品で、生徒にとってもなじみがあり、小説のスキ



▲『新編 文学国語』(文国705) p.10
「1 文学的な文章とは？」

ルが見事に盛り込まれているため、読み方を学ぶ上で最高の教材だといえるでしょう。この名作を土台に、「文学国語」のはじめの一步を踏み出しましょう！

ちまたでは、『言語文化』は古典を優先するので、小説まで手が回らない「『羅生門』は夏休みの課題にした」という声を耳にします。寂しいですね。この単元は、「羅生門」の振り返りにも、選択科目で改めて文学の読み方を押さえないという方にも、きつとお役に立つはずです。

■動画を使って、楽に楽しく

指導書の付属DVDには、「文学の扉を開こう」の講義動画も用意されています。①から⑤まで視聴しても25分くらいです。画面には教科書の紙面やキーワードが示

ではないし、詩が書けるから授業ができるというわけでもないと思いますが、いかがでしょうか。

そこで、まずは地道に、詩の形式や表現に着目することから始めたいと思います。

⑥ 詩の構成と表現」では、「道程」(高村光太郎)を例に、対句、比喩、リフレイン、倒置法など、さまざまな表現技法とその効果について解説されています。「道程」は驚くほど多様な修辭法が使われていますので、技法を学ぶにはぴったりの教材です。もちろん表現技法だけで詩を理解することはできませんが、そこに注目すること作者の思いの強さがわかり、主題に迫るきっかけになります。また、好きな楽曲の歌詞を生徒自身が分析するタイミングにも役立ち、新たな発見につながるでしょう。

■俳句を作って、句会を開こう

また、「⑦ 短歌・俳句の構成と表現」では、句切れ、切れ字、一物仕立て、取り合わせなどについて、例を挙げて説明しています。さらに、「俳句を作ろう」というワークがあり、ここでは「取り合わせ」の俳句の作り方が紹介されています。巻末付録に載っている季語を参考に俳句を作り、クラスで句会を開くのも一興です。

できた俳句はまとめて外部の公募に送るのもよいでしょう。私も「おーいお茶」に何度か生徒作品を応募し、

され、わかりやすく丁寧に説明されていますので、授業開きや自習のときに使えます。その時間も取れない場合は、動画視聴を自宅学習にしたいかがでしょう。ワークシートもありますので、内容を定着させ、テストに利用することもできます(⑥⑦にも動画があります)。

■必要に応じて、教材と関連付けて

まとまった授業で一気④⑤まで扱うのもいいのですが、個々の教材を読む際に、必要に応じて振り返るという方法もあります。

たとえば、「ナイン」(井上ひさし)を読むとき、場面設定を確かめる前に②を参照する。「山月記」(中島敦)を読んで、場面展開を確認するときに④を参照する。「ころ」(夏目漱石)を読んだ後、話し合いをするときに⑤を参照する、などなど。

その都度参照させると、生徒もやり方がわかるので、主体的に作品に向き合うようになります。

■詩の授業は難しい？

高校の国語教師しながら執筆を続け、今年の一月に芥川賞を受賞した井戸川射子さんは、授業で詩を教えるのが難しく、「自分が書いたらわかるかな」と詩を書き始め、初の詩集で中原中也賞を受賞したそうです。あつぱれです。しかし、誰もがこんなふうに詩を書けるわけ

次の一句が選ばれました。

大自然とけこむ僕はモンキチヨウ 中学三年男子
修学旅行で、九州・阿蘇に行ったときの感動を詠んだ句です。

■小説を読んで、仕事や社会に目を向ける

最後に紹介したいのは、新教材「神去なあな日常」(三浦しをん)です。横浜の高校を卒業後、三重県のお山奥にある神去村に派遣され、林業研修生として働くことになった「俺」の日常を描いた小説です。「俺」から見た人々の様子を、18歳の「俺」の言葉で軽やかに語っているため、物語の世界に一気に引き込まれ、過酷な山仕事も、怖い同僚も、「神おろし」という不思議な現象も、違和感なく受け入れられます。

この小説を読んでいると、将来の職業について考える生徒も多いはず。そんなときは、「文学でインターンシップ！」のページを薦めてください。ここには、医療・福祉、工業、メディア、公務員など、多様な現場で働く人々を描いた「お仕事小説」が紹介されています。小説を読んで、仕事や社会をリアルに体感する——生徒にとって貴重な体験になるでしょう。

文学の扉を開いたその先に、明るい未来がありますように。

指導の定着を評価しながら進める「書くこと」の授業

あかまつこうき
赤松幸紀

筑波大学附属高等学校教諭

「現代の国語」での「書くこと」の定着、大丈夫？



■はじめに（お困りの背景の推察）

右掲の「お困り」の背景には、少なくとも次のような事情があるのではないかと推察します。

i「現代の国語」の授業で、思ったよりも「書くこと」の活動の時間が取れなかった。

全国の高等学校にとって二〇二二年度は、年次進行で実施される新教育課程の初年度だっただけでなく、観点別評価の本格的な実施の元年でもありました。「思考・判断・表現」の学習評価を念頭に「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の時間をバランスよく配当し、また評価の材料を得ようとしたとき、じつくり時間をかけて「書くこと」の活動を展開できなかった、というこ

とも珍しくなかったのではないのでしょうか。
ii「現代の国語」の授業をとおして行なった「書くこと」の学習が、「論理国語」に生かせるものとなったかどうか確認がない。

生徒が「現代の国語」に続いて「論理国語」を履修する場合、両科目の指導には系統性が求められます。しかしながら現実問題として、新教育課程初年度からその系統性を構築し、上位科目（論理国語）から逆算して下位科目（現代の国語）での学習活動を評価するのはさすがに難しいと言わざるを得ません。

本稿では「お困り」の背景にi・iiのような事情があると想定し、指導の定着の度合いを評価しながら進めるという、無理なく展開できそうな授業案をお示しします。

■「論理国語」における「書くこと」の学習

まず学習指導要領との対応について触れます。今回お

示しする授業は、「根拠のそろえ方」に注意しつつ、自分の主張を書く学習です。そこで特化する指導事項は、「論理国語」B書くこと(1)「イ 情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえること。」です。この指導事項を「現代の国語」B書くこと(1)「ア 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にする

こと。」の応用としてとらえ、「書くこと」の定着を見するための一つの指標としておきます。

■「書くこと」の授業の構想

ここから先、展開する学習活動の順に沿って授業の構想を述べていきます（「論理国語」「論国705」の教材を使用）。

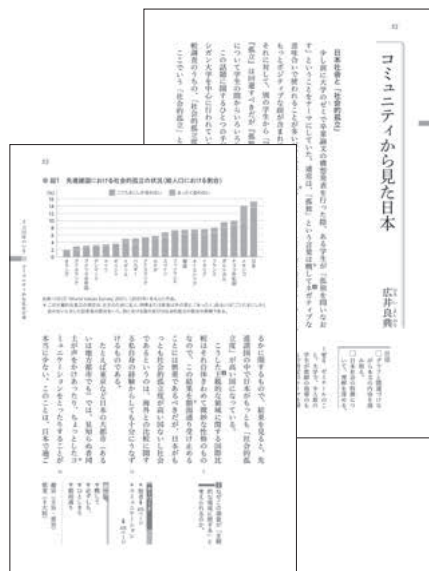
(1) 資料を根拠にして主張する際の注意点を挙げさせる。

まず「現代の国語」の復習から始めます。本授業のキーワードは「根拠のそろえ方」です。それに関して学習者がどのよう認識しているかを最初に把握することです。その時点での「書くこと」の定着の度合いが測れますし、その後学習者がどのように変容していくのかが見やすくなります。教室では口頭でのやりとりだけでなく、学習者にそのときの考えを記録させておくといいでしょう。

(2) 広井良典「コミュニティから見た日本」における資

料の扱い方の工夫を指摘させる。

前掲(1)が済んだところで「さあ実際に書いてみよう」と早速「書くこと」の活動を始めたところと、学習者は面食らってしまうことでしょう。その前に、資料を根拠に主張を述べた既存の文章の一つの手法として読むことで、学習者自身が認識する注意点に、この後の活動で必要となる注意点がさらに上乗せされるはずで。今回は一例として広井良典「コミュニティから見た日本」を挙げました。筆者による情報の扱い方の工夫を指摘するなどの活動をとおして、「書くこと」のための「読むこと」の学習にできるとよいでしょう。

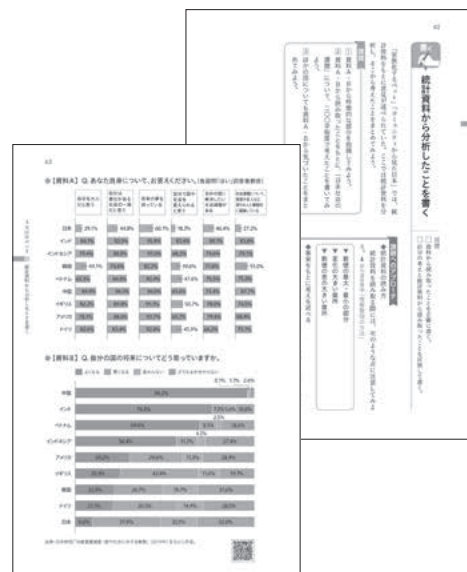


▲『論理国語』（論国705）
pp.52-61 広井良典「コミュニティから見た日本」

(3) 前掲(2)で共有した情報をふまえ、「統計資料から分析したことを書く」の課題に取り組ませる。

学習者が指摘した工夫は教室全体で共有し、もし自分が書いた文章が他者に読まれるとしたらどのような視点で見られるのか、ということにつながる知識を少しでも多く蓄えられる機会を設けたいところです。

ここから「書くこと」の活動の実践です。教科書の資料A・Bをもとに、「日本社会の課題」について自分の考えたことを書きます。グラフの情報を丸ごとすべて使うことは難しいですから、まさに学習者は自分が展開



▲『論理国語』（論国705）
pp.62-63 「統計資料から分析したことを書く」

したい主張のために必要な「根拠のそろえ方」を考えるとになります。

(4) 授業者が用意したループブリックを共有し、学習者同士で作文を相互評価させる。

仮にループブリックがなかったとしても、互いに文章を読み合い、自身の活動の成果と課題を把握させたいところです。この活動が、学習者の今後の探究を駆動するものとなることを期待します。

(5) 資料を根拠にして主張する際の注意点を挙げさせる。前掲(1)で用いた記録用紙に加筆させる形を想定しています。提出されたものを見ることで、授業をおして学習者がどのように変容したのか、また「書くこと」の定着が進んだのか否か、評価しやすくなるでしょう。

■おわりに

ここまで述べた授業案は、一年次の学習を土台とし、それをふまえて学習者を一定の水準に引き上げることを目指すものではありません。「書くこと」の現状の定着度の確認と、そこからの変容を観察するものであり、「現代の国語」で「書くこと」の時間が確保できなかった、評価が難しかった、という場合でも実践可能です。ここで評価した定着の度合いがその後の授業展開の起点となれば、少しでも「お困り」が緩和するのではと考えます。

お困り③ 授業の工夫でさまざまな教材を扱いたい

可能性を秘めた「文学国語」における評論教材

——「思い切って」発展的な学習活動を設定する——

佐々木 一天

福島県立ふたば
未来学園高等学校教諭

「文学国語」では、評論教材をどのように扱ったらよい？



■はじめに

「文学国語」の教科書に収録されている教材としてまず思い浮かべるのは、やはり小説・随想・詩歌といったいわゆる「文学作品」であろう。評論はすぐには思い浮かべないかもしれない。「文学国語」における評論教材の存在に違和感を覚え、「文学国語」じゃなくて『論理国語』に入っていれば……というように、扱いに困る厄介な代物として受け止めてしまう可能性もあるのではないだろうか。

しかし、「文学国語」に収録された評論教材は、大いに歓迎されるべき存在であると言いたい。なぜなら、「文学国語」における評論教材の持つ価値は、論理や内容の

詳細な読み取りに終始するものではないと考えられるからである。「文学国語」で評論教材を扱い、論理や内容の読み取りを出発点として、さらに様々な発展的な学習活動に取り組むことで、自らの内面を見つめ直したり他者に思いを寄せたりといった、感性や情緒の側面に関する力を育成することが可能になるのではないだろうか。

そこで、本稿においては、大修館書店『文学国語』（文学704）の評論教材『遊び』の伝統について、自らのものの見方、感じ方、考え方を深めることへとつながるような発展的な学習活動をいくつか提案してみたい。

■発展的な学習活動案

(1) 導入

『遊び』からイメージすることは？ 『遊び』をしているときの自分の内面はどんな感じか？』といった問いを提示し、自らの生活体験を振り返らせ、簡単に文章化

させてみたい。それぞれがまとめた内容をグループ内で共有し合っても良いだろう。多くの学習指導案において「導入」に割く時間は短く設定されているように感じられる。しかし、教科書本文の読み取りの後に設定する発展的な学習活動への布石として、導入の時間を長く確保してみるのはどうだろうか。自らの生活体験をしっかり振り返り、深く見つめ直すきっかけにさせたい。

(2) 本文の読み取り

評論教材であるので、教科書本文の読み取りを細かくやりたくなるかもしれない。しかし、本文の読み取りを全て「対話的」に進めさせてみるのはどうだろうか。段落分けを提示した後、段落ごとの見出しの作成やキーワードの抽出などの学習活動を、全てグループ活動（二～四人）として設定し、読み取りを進めさせるのである。できるだけ生徒同士が話し合いながら本文の内容を読み取れるように、支援や解説に工夫を施したい。

(3) 文章作成

「遊び」の経験を通して、生きている実感や生の充足感を味わったことがあるか」といったような、「(1)導入」でまとめた内容をさらに深めさせるような問いを投げかけ、文章作成を行わせたい。「遊び」の経験が人間の内面を大きく揺さぶり、人生や生きることに大きく影響

を与える」という点を意識しながら、自らの「遊び」の経験をまとめるのである。自らの生活体験を振り返り、より深く見つめ直す場になるのではないだろうか。

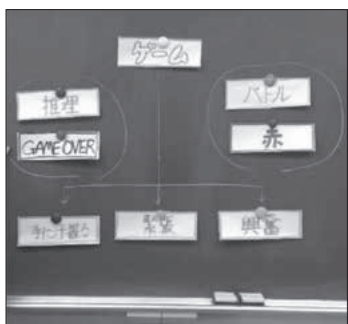
体育系の生徒であればそれぞれの競技にもとづいた体験を、文科系の生徒であればコンクールや発表会に関する体験を振り返っても良いだろう。カラオケやショッピングといった日常生活の一コマに具体例を見つめる生徒も、幼少時の記憶をたどる生徒もいるだろう。「(1)導入」でまとめた内容と「(2)本文の読み取り」で把握した筆者の主張を関連させながら、自らの生活体験を振り返り、深く見つめ直し、自らの言葉で表現することで「文学国語」の目標の一つである「自分の思いや考えを広げたり深めたりすること」が可能になると考えられる。

(4) スピーチ

「(3)文章作成」の成果物をもとに、自らの「遊び」の経験をテーマにして、キーワードを書いた「文字カード」を黒板に貼りながらスピーチをする場を設定してみたい。「文字カード」を用いることで、話す内容を覚えるという話し手の負担を減らすとともに、「文字カード」という視覚的な情報が提示された状態でスピーチを聞くので、内容が印象に残り、聞き手の理解度も上がると考えられる。各々の「遊び」の経験について自分の言葉で

伝えたり、他人の話を聞いたりすることで、互いに自らの生活体験を振り返り、深く見つめ直すきっかけにさせたい。

「文学国語」の授業において、「話すこと／聞くこと」の活動を取り入れることに對する疑問の声もあるかもしれない。しかし、話すことでこそ、自分の思いや考えを思うように伝えられる生徒もいるに違いない。また、「文字カード」のような補助資料を用いることで、自分が伝えたいことをより効果的に伝えるための手法について学ぶ機会にもなるのではないだろうか。「話すこと



▲スピーチの際に用いる文字カード

／聞くこと」の活動を設定することで、学習者が「他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりする」ことを、より可能にする授業を作ることができると考えられる。

(5) 学習活動を設定する上で

目の前の学習者の実態を鑑みたときに、「この生徒た

ちにできるだろうか」というように、発展的な学習活動を設定することにはためらう場面もあるのではないだろうか。しかし、ここは「思い切って」様々な発展的な学習活動を設定してみたい。そして、発展的な学習活動を成り立たせるために「(4)スピーチ」で提案した「文字カード」のように、学習者の実態に応じて様々な工夫を施した支援を行いたい。授業者の工夫次第で、学習者が意欲的に取り組みたいような学習活動を設定することが可能になり、ひいては、授業者のねらいを達成する授業づくりへとつながるのではないだろうか。

■おわりに

以上述べてきたように、「文学国語」において評論教材を用いて様々な発展的な学習活動を設定することで、「文学国語」が目標に掲げている感性や情緒の側面に関する力を育成することが可能になると考えられる。「身に付けさせたい資質・能力を育成する授業づくりのために、教材をどのように扱うか」という点において、指導者側の手腕が試されているのではないだろうか。指導者の努力や工夫次第で教材の価値が決まるという意味では、「文学国語」における評論教材は決して扱いに困るような厄介な代物ではなく、むしろ可能性を秘めた歓迎すべき「宝の山」なのである。

「文学国語」でできる古典のおさらい

いしなべゆうだい
石鍋雄大

東京都立大泉高等学校
附属中学校教諭

「古典探究」を履修しないと、
古文・漢文を扱えない？



■はじめに

新課程となり「論理国語」「文学国語」「古典探究」「国語表現」が選択科目になりました。単位数上、すべてを選択することは難しいため、多くの学校の国語科内または学校全体で議論がなされたと伺っています。その中には、「古典」を授業で扱いたいけれど、科目としての「古典探究」を選択させることはカリキュラムの都合上難しく、断念する学校もあったのではないかと推察します。

「文学国語」という科目は、学習指導要領解説において「必要に応じて」「古典における文学的な文章」を扱うことができるかとされています。大修館書店『新編文学国語』（文国705）では、「古典の世界」として、いわゆ

る有名古典が原文で十数編掲載されており、「古典探究」が履修できない学校でも、学習の中で古典を効果的に扱うことが可能です。

以下では、『新編文学国語』の教材を用いた二つの授業案をお示したいと思います。

■授業案① 現代語訳を比較し、表現の特徴をつかもう
有名古典は、多くの作家によって現代語訳が行われています。例えば「竹取物語」は川端康成や北杜夫、星新一など、「源氏物語」は与謝野晶子や谷崎潤一郎、瀬戸内寂聴、角田光代など、他にも多くの作家が訳しています。原文とこれらの訳を比較し、文体の特徴や効果について考えたり、そこから訳者の解釈の違いについて考察したりする活動はどうでしょうか。内容だけではなく表現を強く意識して作品を読むという点で、翻訳作品や古典でこそできる学習ではないでしょうか。ちなみに、源

氏物語の与謝野訳は誤訳も多いとされますが、吉本隆明が表現の面から一つの作品として捉えることで与謝野訳を支持しているのも興味深い点です。



▲『新編 文学国語』（文国705） pp.114-115 「かぐや姫の昇天」

他にも、昇天の際、ペガサスが迎えにくる「かぐやひめ」の絵本や、女房の語りを光源氏の一人称視点で語り直した橋本治の『窈窕源氏物語』、漫画化・映像化された古典など、さまざまな表現で古典は現代につながっています。原作と関連作品を比較することで、そのおもしろさに気づくとともに、自分自身の見方や考え方を広げることができるでしょう。

「古典の世界」の最終ページにはそれぞれ簡潔な作品解説と「ブックガイド」が示されています。「ブックガイド」には、古典作品を有名作家が翻訳したものや、作者に成り代わって解説したもの、漫画など、生徒の興味・関心に応じたものが多く示されています。教師が提示するだけでなく、生徒自身の興味・関心に応じて選んでもよいかもしれません。

■授業案② 作品の解釈をふまえて考えを広げよう

生徒の古典嫌いの理由の一つに品詞分解があるのは多くの先生方が感じていることかと思えます。確かに、品詞分解は古典の世界を深く知り、文章に散りばめられた作者の工夫や心情の機微を理解するのに重要な作業です。しかし、それ以前に、生徒自身が作品の内容を大きく捉え、展開に興味をもち、作品を楽しめるようにしたいものです。その上で、品詞分解を通じた文法的な解釈

や古典常識などの補足説明を行えば、より作品世界を深く味わうことができるのではないだろうか。「古典の世界」では、傍訳によって、古典に苦手意識をもった生徒にも作品世界を比較的抵抗なく味わせることが可能です。

「古典の世界3」に示されている枕草子「はしたなきもの」でも、傍訳を参考にしながら生徒が自力で読解をすることができそうです。

また、教科書の工夫として、「はしたなきもの」という言葉自体には傍訳をつけていませんので、本文を読んだ上で、題名としてはどのような訳語が適切か考える活動ができるでしょう。「さきまづいもの」という意味は現代語とは違うので、意外に思う生徒も多いかもしれません。

「はしたなきもの」と同様に、「かひなし」「めでたし」にも傍訳がついていませんが、こちらは現代語から意味を想定することができ、古語と現代語とのつながりを実感できるという意味で対照的です。古今異義語や、古語と現代語のつながりについて気づかせることも可能でしょう。

さて、具体的な授業としては、次のような形を想定しました。まず、「はしたなきもの」の意味を本文の内容から考えるという活動目標を示し、音読をした後、傍訳

等を参考に自力で大まかに読み進めます。次に、本文の内容を参考に各自で「はしたなきもの」の意味を考えさせ、最終的に、グループで話し合い、発表する流れです。話し合いの際には、本文に根拠を求めさせることで、本文の表現に着目させることが大切です。

「はしたなきもの」の意味が「さきまづいもの」だとわかった後には、自分の「はしたなきもの」を書くことも楽しい活動になるでしょう。書いた後は、クラスメイトの作品と交流したり、改めて原文と比べたりすることで、人々がもつ感性や感覚の共通点や相違点について考えを深めることができるはずです。

他にも、類聚章段の「かたはらいたきもの」や「うつくしきもの」などを使用して、発展的に同様の活動を行うことが可能でしょう。

■おわりに

古典に苦手意識をもつ生徒に対してどのような支援をすべきなのか、私たち国語教員にとっては大きな課題です。今回の新課程編成によって、「文学国語」という科目で古典「文学」として授業を行うことは、その一つの突破口になるかもしれません。楽しく魅力的な授業がたくさん開発され、全国の教室で行われることを確信しています。

お困り③ 授業の工夫でさまざまな教材を扱いたい

評論教材と文学教材をつなげて学ぶ 「論理国語」の授業

栗原 賢

文化学園長野中学・高等学校教諭

——驚田清二「補助線を引きながら考える」×中島敦「山月記」——

文学教材を活用して「論理国語」の読みを深めるには？



■はじめに

新科目「論理国語」を採択した学校の中には、「定番の文学教材がまったく扱えなくなってしまうのだろうか」と悩まれている先生も多いのではないだろうか。しかし、授業の工夫によっては、文学教材を用いつつ、論理的な力を養うことも、十分に可能だろうと考えられます。

その方策の一つとして、評論教材を読むことを活動の主にしつつ、その読みの一助となるような文学作品を副教材として適宜用いるという方法が考えられます。評論文の筆者の主張や問題意識を、文学作品の言葉、登場人物の心情、世界観と結びつけて考えることによって、生徒たちは筆者の主張をより多角的に吟味し、より深く思

索することができそうです。

本稿では、大修館書店『新編 論理国語』（論国706）に掲載されている評論文「補助線を引きながら考える（驚田清二）」を主教材に、そして小説「山月記（中島敦）」を副教材に設定した授業提案をしていきます。「論理国語」で育むべき資質・能力の軸はブラさずに、文種の異なる二つの教材を効果的に用いて、生徒のよりよい学びにつなげていく、そんな国語の授業を目指しました。

■評論教材と文学教材の内容と接点

「補助線を引きながら考える」は、初めに自分の存在する意義すら悩んでしまう現代人の苦悩を提示し、自身や世の中の答えのない問いに対して、さまざまな角度から見るための「補助線」を引いて「賢く」考え続けることの重要性を述べている文章です。本教材は、これ

から社会に出ていく高校生たちが自分自身の過去、現在、そして未来を見つめる契機とすることができそうです。そのため、教科書では目標として次の二つを設定しています。

- ① 筆者の問題意識をとらえ、主張を読み取る。
- ② 読み取ったことをふまえて、自分の思いや考えを深める。

この評論文を読んでいく上でポイントの一つになるのが、題名にもある「補助線を引く」ということの意味づけです。確かに、本文全体をふまえれば筆者の主張を簡潔にまとめることもできます。しかし、生徒たちには「補助線を引く」とはどういうことを実感し、さらに自分の考えを深めてほしい。そこで、本文中の「文学や芸術作品も、同じ苦しみの中から生み出されたものだから、いろいろな補助線を与えてくれるはずだ。」という記述に注目します。そして、「では、今自分もっている悩みや問いに対して、実際の文学作品からどのような補助線が得られるだろうか」と生徒たちに問いかけます。

ここで生徒たちに提示する文学作品が、中島敦「山月記」です。虎になった李徴が、自意識への苦悩や人間存在の不条理さへの嘆きなどを、親友である袁孝に語る物語です。この作品を媒介として、生徒たちが自らの悩み

や問いに「補助線を引く」ことの意味を体験的に理解し、自らの考えを掘り下げていくことを目標にしていきます。

■指導のポイント

学習を円滑に進めるために、「補助線を引きながら考える」の読みを丁寧に行うこと、「山月記」の読みはポイントを絞って行うことが大切です。あくまで評論文の筆者の主張が単元の主役ですので、この意味を第一次でしっかり全員で共有しておきましょう。さらに、「山月記」は詳細に読もうとする時間がかかりすぎる上に、漢文調の文体や漢詩によって一人で読み進めることが困難な場合が考えられます。教師側からの補足説明や資料を充実させ、初めから目的意識をもって読んでいくようにしていきます。

また、学びの方向性として、「悩みの解決自体を目的としない」ということを押さえておきましょう。「補助線を引きながら考える」には、「わからないことでもそのまま持ち続けることが大切」という趣旨の記述があります。「自分の悩みを解決するのではなく、別の角度から見るために『山月記』を読む」ということを生徒がきちんとふまえているかで、単元のまとめでの記述内容も変わってくるはずです。

段階 学習の流れ

第2次（4時間） 「山月記」から「補助線」を得る		第1次（4時間） 「補助線を引きながら考える」を読む	
まとめ	展開	導入	
○「補助線を引きながら考える」「山月記」での活動をと おして、再度導入の自分の悩みに立ち返り、その悩み についての今の自分の考えをまとめる。	○単元冒頭で書き出した悩みに対して、「文学作品から 『補助線』を得てみよう」と投げかけ、「山月記」を提 示する。 ○本文を読み、「李徴の悩み」を境遇・性格・人間関係な どの観点からまとめる。 ※観点は導入で考えた「悩みの分類」を用いられるとな およい。 ○それぞれ「李徴の悩み」を一つ取り上げて、「自分だっ たら李徴にどのようにアドバイスするか」を考え、ク ラスメイトと共有する。	○「補助線を引きながら考える」を意味段落ごとに精読 しながら筆者の問題意識や主張を整理する。 ※特に、「現代人の苦悩」と「賢くならなければならない」 という筆者の主張を軸に、「補助線を引きながら考える」 という言葉の本文中の意味を的確にまとめる。	

▲単元「『自分の悩みとの向き合い方』を考えよう」(展開例)

そして「李徴の悩み」を考える際には、単元冒頭で書き出した「自分の悩み」を意識するように声掛けしていきます。『自分の性格と上手につき合えない』『勉強しても成績が上がらない』『自分の好きなことが分からない』などの素朴な悩みや不安は、李徴の苦悩と重なるところがあります。これによって、「同じ苦しみの中から生み出された」文学作品が「補助線を与えてくれる」ことを生徒たちはより実感していくと考えています。

■おわりに

本稿で示した授業案以外にも、『新編 論理国語』に掲載されている評論教材を用いた授業として、たとえば次のようなものはどうでしょうか。

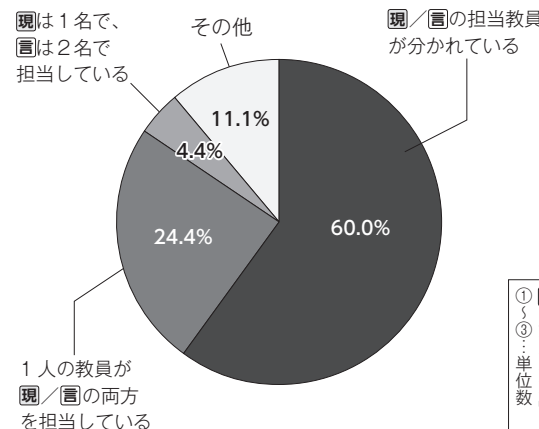
- ・「記号的メディアと物理的メディア」(伊藤亜紗)×「握手」(井上ひさし)で学ぶ「具体と抽象」
- ・「紙の本はなくならない」(内田樹)×「旅する本」(角田光代)で考える「紙の本の意義」

これらも、「評論教材に『補助線を引く』ための文学教材」という位置づけで考えています。組み合わせはまさに無限大です。先生方の知見を生かし、ぜひ豊かな「論理国語」の授業を模索してみてください。

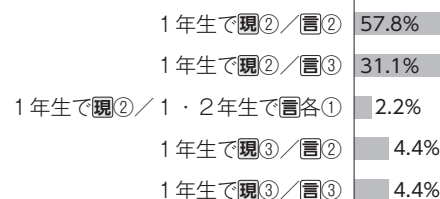
新課程国語の実態調査

昨年度からスタートした新課程の国語。カリキュラム、選択科目の履修、文学の扱いなどについて、ウエブアンケートで学校現場の先生方にかがいました。

Q1 必修科目の分担について教えてください。



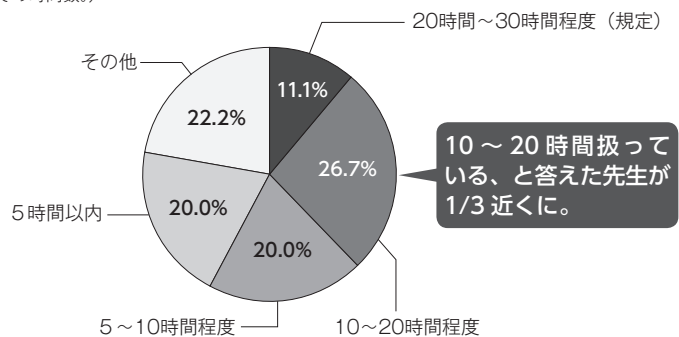
Q2 必修科目のカリキュラムを教えてください。



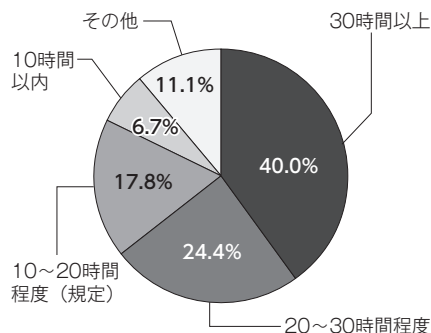
全体の約3割が「言語文化」を増単位！

Q3 「現代の国語」で「話すこと・聞くこと」をどの程度行っていますか。

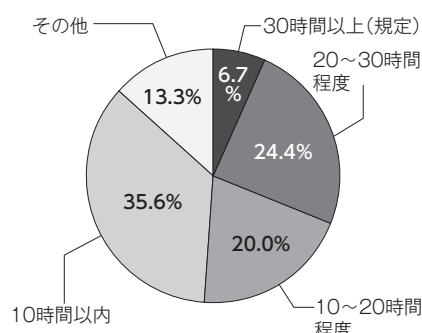
（* Q3～5：1年間での時間数。）



Q5 「現代の国語」で「読むこと」をどの程度行っていますか。



Q4 「現代の国語」で「書くこと」をどの程度行っていますか。



■「現代の国語」の授業

Q3～5では、「現代の国語」の授業について尋ねました。「話すこと・聞くこと」では、約10%の先生が規定配当時間である「20～30時間程度」と回答。「書くこと」は、規定の「30時間以上」扱ったと答えた先生が6・7%に留まる一方、「読むこと」は規定の10～20時間よりも多く扱っている先生が64・4%いました。各領域では、以下の授業が多く行われているようです。

【話すこと・聞くこと】

- ① グループでの話し合い
- ② ペアでの会話の練習や自己紹介
- ③ プレゼンテーション

【書くこと】

- ① 読んだ文章をふまえて意見文を書く
- ② 調べたことをレポートにまとめる
- ③ 出題されたテーマで小論文を書く

【読むこと】

- ① 「対比」「具体と抽象」など、身につけた読み込みの力を明確化した授業
- ② 定番の評論教材を用いた読解
- ③ 「書くこと」と連動させた授業

■必修科目の分担

Q1では、必修二科目の分担について尋ねました。「科目ごとに担当が分かれている」と答えた先生、「一人で両科目を担当している」と答えた先生で、合計約85%という結果に。「その他」には、「現代文と古典で担当が分かれている（『現代の国語』の評論と『言語文化』の小説を現代文担当の教員が教えている）」と回答した先生もいました。「国語総合」時代の役割分担を引き継いでいる学校もあるようです。

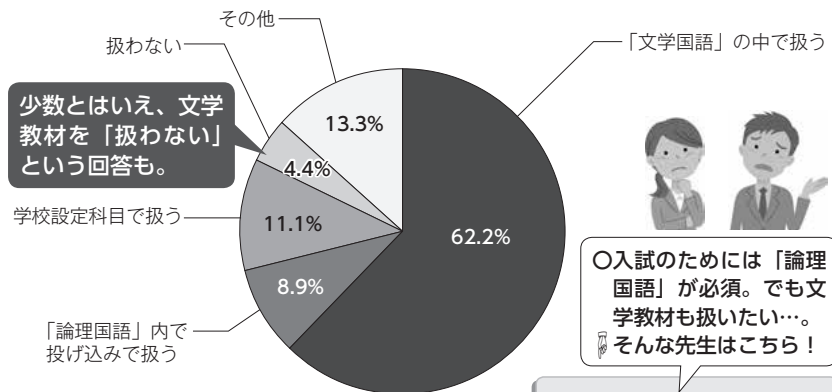
■「言語文化」の増単位

Q2では、必修のカリキュラムについて尋ねました。約30%の先生が「『言語文化』を3単位で扱う」と回答。「古典と近現代の小説を2単位で扱うのは厳しい」という意見が目立ち、多くの先生が時間数の不足を実感しているようです。一方で、「読み比べ教材が充実していると、現代文と古典を同時に扱えるので助かる」という声もありました。

Q8 どの選択科目を開設する予定ですか。(複数回答)



Q9 選択科目において、近現代の文学作品をどのように扱う予定ですか。

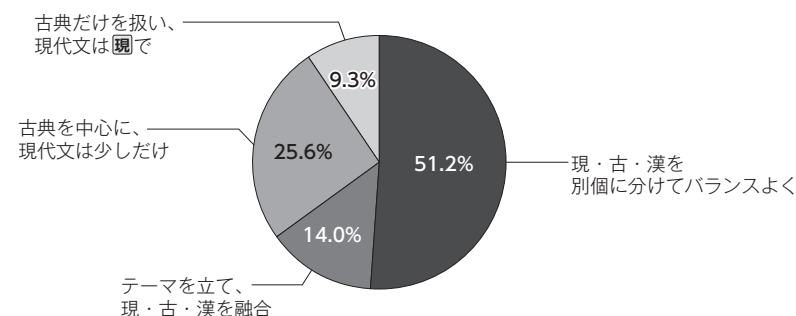


『論理国語』『新編 論理国語』学習ノート小説編のご案内

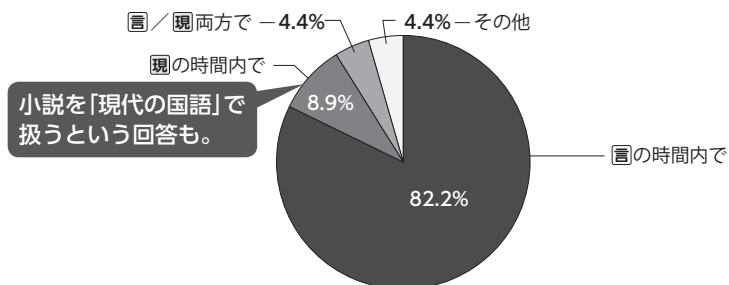
予価：352円(税込)
収録教材：
●「山月記」(中島敦)
●「こころ」(夏目漱石)
●「舞姫」(森鷗外)
●「檸檬」(梶井基次郎)

この4本の小説教材について、
・小説本文(脚注付)
・「学習ノート」設問
・別冊「解答・解説編」
をご用意しています。

Q6 「言語文化」の授業の実態に近いものを教えてください。



Q7 近現代の小説はどの科目で扱っていますか。



■「言語文化」の授業

Q6では、「言語文化」の授業内容について尋ねました。「現・古・漢を別個に分けてバランスよく」が過半数を超える一方、「テーマを立て、現・古・漢を融合」という回答は14%でした。また、「現代文は少しだけ」「現代文は『現代の国語』で」という回答は、合わせて約35%に上りました。

「言語文化」という科目自体については、以下のようなコメントがありました。

○現・古・漢をバランスよく扱うことが難しい。掘り下げて読み深めるだけの時間がない。

○科目の趣旨には大いに賛同できるが、単位数に無理があることは事実。

■小説はどの科目で？

Q7では、「羅生門」をはじめとする「現代の小説」について尋ねました。「言語文化」で扱う」と答えた先生が8割以上に上りました。一方で、「現代の国語」で「言語文化」「現代の国語」両方で」という回答も合計で13%ほどありました。

■調査の概要

【調査時期】2022年11月～2023年1月
【回答総数】45名

*弊社担当者が学校訪問の際や学会等でウェブアンケートご協力のお願いを配布し、ご回答いただいた内容をまとめたものです。全国の高校すべての実態を調査したものではございません。ご協力いただいた先生方に、厚く御礼を申し上げます。

■選択科目

最後に、選択科目について尋ねました。どの科目を履修するか、「近現代の文学作品」をどの科目で扱うかなど、多くの課題があるようです。今年度からいよいよ新選択科目もスタート。今後も新課程の実態について、注視していきたいと思っています。

国語教科書のご案内

特設サイトは
こちら

● 1年生 必修(2単位) ●

● 2・3年生 選択(4単位) ●

実社会を生き抜くための
言葉の力を育む

②



③



⑥



⑦

新編シリーズ



⑩

時代と空間を越えた
言葉と文化の豊かさを知る

④



⑤



⑧



⑨



⑬



⑪

いずれかを選択

「新編 文学国語」
には古典もあり

文学教材の定番といわれる森鷗外「舞姫」。近年では「古典と同じで文章が難しい」「教えたくても時間が取れない」などという声も聞かれる。そんな先生方には、ぜひ本書を一読されることをお勧めしたい。生徒が主体的に「舞姫」を読み始めるためのヒントが満載なのである。

■謎解き感覚で徹底解説

「舞姫」を読む上で壁となるのは、まずは文体と語彙だろう。本書では、気軽に「舞姫」の世界を楽しめるように冒頭に総ルビの原文を掲載し、394もの丁寧な語注を設けた。「肩章」^{（肩章）}「一等ドロシユケ」^{（ドロシユケ）}など著者描き下ろしのイラストも参考になる。

第2章では37の表現を丁寧に解説。「大道髪の如き」ベルリンの大通りや「間口せまく奥行のみいと長き」カフェの様子など、豊富な図版資料も含めて「舞姫」の時代や情景を深く味わうことができる。さらに第3章では「ウンター・デン・リンデンから戦勝記念塔が本当に見える？」など、七つの「ツッコミ」で詳しく検証する。

第4章では「エリスのお宅拝見」豊太郎の徘徊ルート^{（徘徊ルート）}など、小説に描かれない細部に謎解き感覚で迫る。複数の仮説を立てて検証し、「舞姫」の世界を映像化していくような手法は、探究的な学習として教室に取り入れるのもおもしろい。

■現代語訳の一人称は「僕」

「舞姫」の世界を存分に楽しんだ後は、著者による現代語訳で再読したい。鷗外も主人公・豊太郎も、ドイツ留学時ともに二十代。年齢や環境にふさわしい一人称として「僕」が採用されたことで、物語の臨場感が増し、主人公の心情が読者にリアルに伝わる。遠い時代の異国を舞台にした物語が、新たな存在感をもって立ち上がってくる。ことだろう。

新刊紹介

六章 いちか著

鷗外「舞姫」徹底解説

文||夏目京



【主要目次】

巻頭絵 1888年ベルリン市街図

「舞姫」の街角、「舞姫」のベルリン

原文 舞姫(森鷗外)

第1章 「舞姫」のところがまえ

第2章 ドンドン知りたい「舞姫」のナカミ

第3章 「舞姫」七不思議!

第4章 「舞姫」ルーペ

第5章 迷わない「舞姫」

第6章 ほんとうの「舞姫」ものがたり

「舞姫」現代語訳

■新発見の事実も

著者の六章いちか氏は、二〇一三年に「舞姫」のヒロイン・エリスのモデルを特定したベルリン在住のノンフィクション作家。〇九年から足掛け一三年にわたる粘り強い現地調査で、今回も新発見が明らかにされた。鷗外の元恋人エリーゼ・ヴィーゲルトが来日のため旅券を取得していたという事実もその一つで、本人自筆のサインとともに第6章に紹介されている。

本書において、著者は事実と小説に描かれたこととの違いを明らかにする。執筆当時の背景をつぶさに知ること、鷗外が「舞姫」に込めた思いにも迫ることができる。

■現代語訳の一人称は「僕」

「舞姫」の世界を存分に楽しんだ後は、著者による現代語訳で再読したい。鷗外も主人公・豊太郎も、ドイツ留学時ともに二十代。年齢や環境にふさわしい一人称として「僕」が採用されたことで、物語の臨場感が増し、主人公の心情が読者にリアルに伝わる。遠い時代の異国を舞台にした物語が、新たな存在感をもって立ち上がってくる。ことだろう。

「他者に共感する力」「論理的に考える力」
「言葉で伝え合う力」を高める

新編 現代の国語

現国707 B5判 238ページ



B5判



グローバル社会に通用する実践的な
「話す・聞く」「書く」「読む」力を育む

現代の国語

現国706 A5判 286ページ

豊富な読み教材で、

評論文 15本

導入・参考ほか 9本

実用的な表現 10本

統計資料 14本

しっかりインプット!



特色 4

大判ならではの、見やすく
わかりやすいレイアウト
「話すこと・聞くこと」「書くこと」の教材
は上段に学習活動 下段にポイント欄を配
置。学習活動の流れがわかりやすい紙面を
実現しました。図表や写真の可視性もアッ
プ!

特色 3

新鮮かつバラエティー豊かな
読み物が盛りだくさん
論理的な思考力を育む評論、関心や意欲を
高めるエッセイ、料理レシピやアニメ
ーション映画の企画書などの実用的な文章と
いった、多様な教材を用意しています。

特色 2

基礎から発展へ、
一歩ずつステップアップ
教科書全体をとおして、学習段階を考慮し
ながら構成しました。国語の力を着実に身
につけていくことができます。

特色 1

三つの領域を
バランスよく配置
言葉に関する知識・技能と「話すこと・聞
くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域
の力を育む教材を、学習のねらいに応じて
10の単元に分けて構成しました。

特色 4

主体的・協働的な学びを
サポートする充実の資料編
生徒が主体的に学ぶために役立つ「豊かな
言語活動のために」「キーワード解説」「情
報の集め方」など、付録・資料も充実して
います。

特色 3

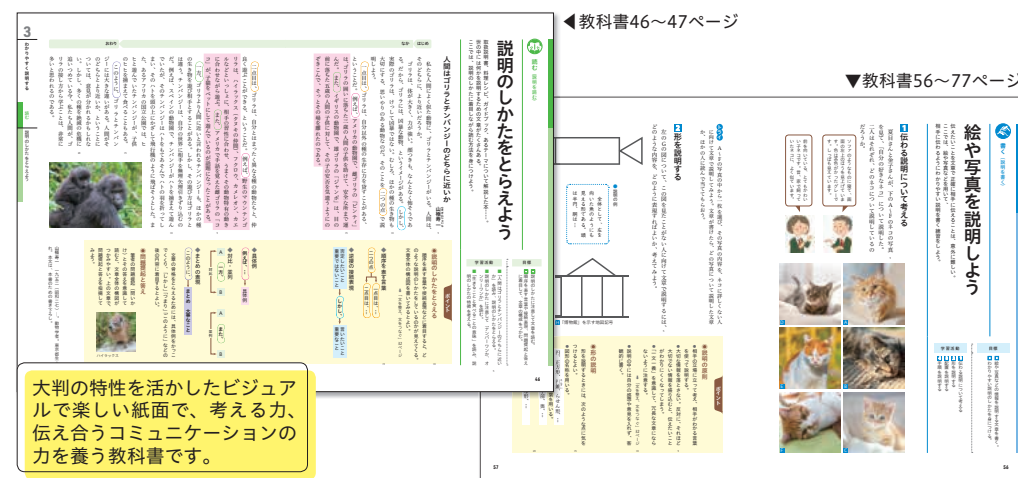
実社会・実生活で
役立つ力を育む
企画書プレゼンテーションなど、実社会
実生活で必要とされる活動を豊富に設定
規約や広告など、実社会で用いられる表現
に親しむコーナー「社会への視点」も設け
ました。

特色 2

新しい大学入試に対応した
教材を多数収録
統計資料や図版の解釈、複数の文章や資料
の比較読みなど、新たな学力に対応した教
材を多数収録しました。

特色 1

3領域の学習を徹底サポート
「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読む
こと」の学習目標・手順を明確化。「ウォー
ムアップ」「ワーク」を設置し、何を、なぜ、
どのように学ぶかが見えるようにしました。



大判の特性を活かしたビジュアル
で楽しい紙面で、考える力、
伝え合うコミュニケーションの
力を養う教科書です。



身につけた力を意識した構成
で、見通しをもちながら学習が
進められる、現代社会に必要な
実践力を鍛える教科書です。

新鮮な教材で言語文化への興味をかき立て、
ことばの旅へといざなう

新編 言語文化

言文706 | B5判 | 312ページ



B5判

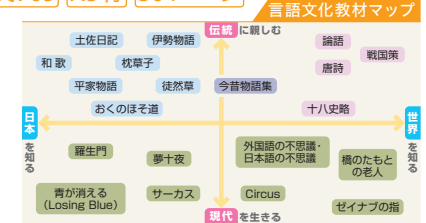


- 特色 4** 大判だからできた、見やすく楽しい紙面
大判の特長を生かして、読みやすくわかりやすい紙面デザインを実現。生徒の好奇心を刺激する写真やイラストを多数盛り込み、眺めるだけでも楽しめる教科書に仕上げました。
- 特色 3** 授業で使える！古文編・漢文編の工夫
教材本文では、見開き単位を意識した紙面構成をし、使いやすいレイアウトを追求しました。古文の助動詞や漢文の訓読など、つまずきやすいポイントについても、わかりやすく徹底的に解説しています。
- 特色 2** 日本の「言語文化」を
実感できる「言語文化の窓」
「言語文化の窓」を、各単元に設置。受け継がれてきた言葉や文化についての解説、著名人による古典作品の紹介など、興味・関心をかき立てるビジュアルなページです。
- 特色 1** 新鮮で魅力的な教材群
言葉の価値や文化のつながりなど、重要なテーマに触れられる新教材が満載！小説は、定番の「羅生門」を始め、夏目漱石から村上春樹まで、近現代の名作を網羅しました。

多彩な教材を揃えた、
新しい国語のスタンダード

言語文化

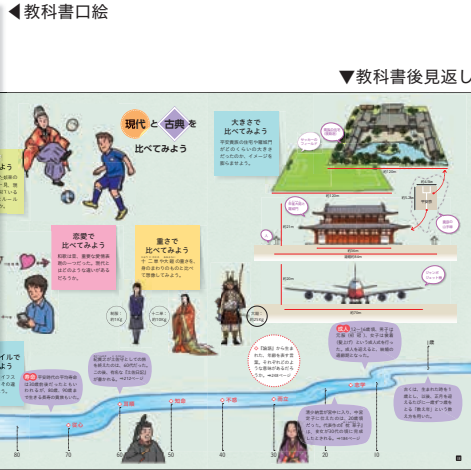
言文705 | A5判 | 364ページ



タテとヨコ。
ふたつの軸で、言葉と
文化を探究する。



- 特色 5** 図録・資料の充実
巻頭・巻末の図録では、世界と日本の言葉や日本の伝統芸能の演目を幅広く紹介。豊富な資料図版で理解を助けます。
- 特色 4** 多彩なコラム
作品を読み解くための技能をおさえる「解釈の視点」、豊かに言語文化の知識を育む「言語文化の窓」に加え、言葉に関する豆知識「言葉のタネ」を設置しました。
- 特色 3** 新しい大学入試にも対応
和歌と鑑賞文、古文と漢文の比較読みなど、新しい大学入試にも対応する教材を豊富に収録。新傾向の入試対策も万全です。
- 特色 2** 自ら調べ、自ら深める「探究」
言語文化に関するテーマについて、生徒が自分で調べ、考えを深めるコーナー「探究」を設置。多彩な資料をもとに、探究的な学習を実践することができます。
- 特色 1** タテとヨコの言語文化
ことばと文化の歴史的な連なりを考える「タテ」の言語文化と、さまざまな地域・国とのつながりを考える「ヨコ」の言語文化。古文・漢文はもちろん、小説の名作や翻訳の文章も掲載。広い視野で学べる教科書です。



とらえる。整理する。解決する。
社会で役立つ「生きた論理の力」を育む

新編 論理国語

論国706 A5判 330ページ

「読む」も



「書く」も



楽しみながら、考える力を組み立てる。



特色 4

楽しく役立つコラム・資料
論理の小ネタを紹介する「論理の窓」のほか、巻末資料では思考ツール、情報収集のコツ、引用の方法など、豊富な資料類をご用意。論理を活用し、自ら考える力を育みます。

特色 3

新しい大学入試も怖くない！
統計資料の読み取り、複数の文章の比べ読みなど、新しい大学入試にも対応できる教材を豊富に収録。新傾向の入試対策も万全です。

特色 2

苦手を得意に変える「書くこと」の学び
「書くこと」の単元を四つご用意。段階的に配置された「ワーク」で、着実に「書く」力を身につけることができます。小論文・レポートはもちろん、志望理由書や自己推薦書の書き方も徹底サポート！

特色 1

基礎から発展へステップアップ！
教科書全体を通して、学習段階を考慮し、一歩ずつ成長できる構成に。ウォームアップで楽しい準備体操、ごく短い文章教材「例題」で読解の練習、単元末の設問コーナー「フォーカス」で論理の力を固めます。

「読むこと」と「書くこと」を往還し、
強靱な思考力・判断力・表現力を養う

論理国語

論国705 A5判 438ページ



「問い」「読む」「書く」の反復で 確かな国語の力を育む。



特色 4

学びを深める充実の資料
教材の読みを深める「キーワード解説」、教材間を横断して知識をつなげる「キーワード索引」「人名索引」、論理的思考を深め、表現活動をサポートする「知の道楽箱」など、教材以外の資料も充実しています。

特色 3

新しい大学入試への対応
「学習のポイント」に、筆者の主張を吟味・検討したり、複数の資料を比較したりする設問「考察・発展」を設置。日々の学習に取り組み中、新傾向の入試にも対応できます。

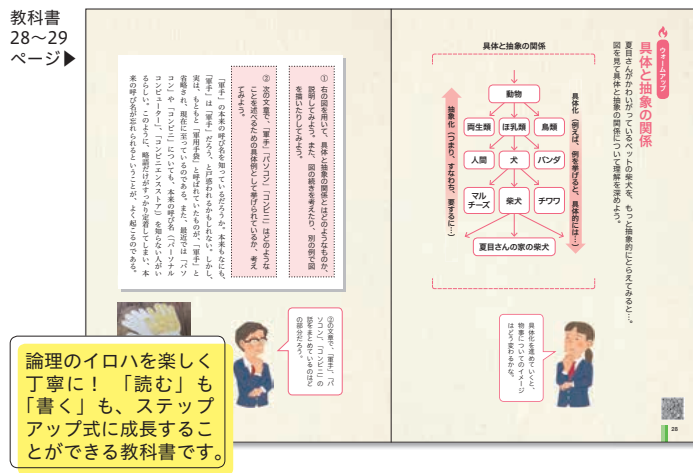
特色 2

自己の世界を広げる多様な教材
各単元に、現代を考える上で押さえておきたい、多様なテーマの教材を複数配置。読み比べることで、多角的な視野を養えるようにしました。さらに単元末には、古今東西の名著を引用付きで紹介した「テーマと読書」を設置。さらなる探究に誘います。

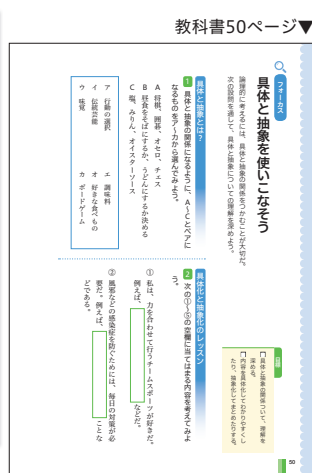
特色 1

「問い」「読む」「書く」とおして確かな力を
各単元に、教材と関連した「問い」を設置。目的をもって、「読む」教材と向き合えるようにしました。さらに単元末の「書く」活動に取り組み、読む教材で学んだことを、自己の表現にもつなげます。

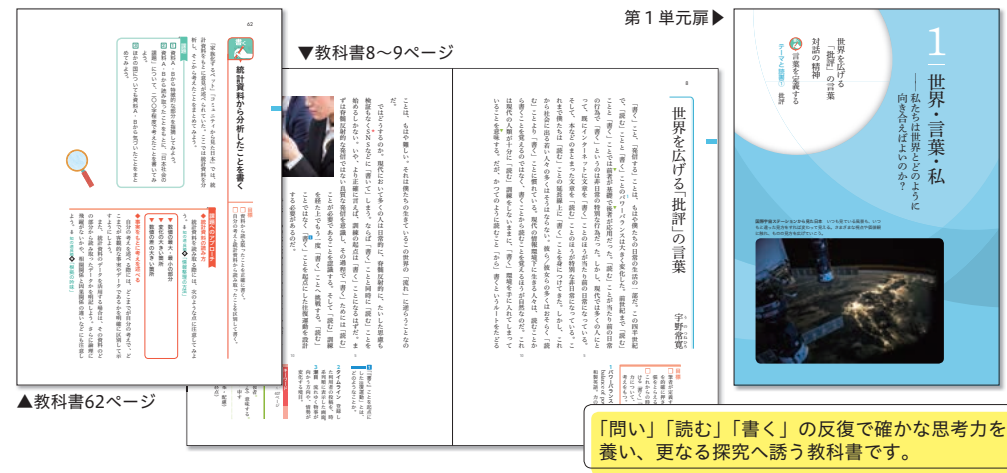
教科書 28～29 ページ▶



教科書50ページ▶



第1単元扉▶



「問い」「読む」「書く」の反復で確かな思考力を
養い、更なる探究へ誘う教科書です。

評論も、古典も、書く力も。
文学のすべてを、この一冊で。

新編 文学国語

文国705 A5判 398ページ



特色 4

学びを支えるブックデザイン
読みやすい本文書体、美しい挿画等の見た目はもちろん、行の数えやすさ、読みの流れを妨げないページめくりなど細部にまで気を配ったデザインで学びのバリアフリーを目指しました。

特色 3

特集とコラムで文学がわかる
巻頭の「文学の扉を開こう」で文学の読み方を具体的に解説。コラム「こゝろはや文学の窓」も併せて、文学を読み、楽しみ、深く味わう力が身に付きます。

特色 2

評論も、古典も、書く力も
小説だけでなく、随想・評論も12本収録。古典の名作をコンパクトに味わえる「古典の世界」、楽しみながら創作に取り組める「書くこと」など、文学のすべてを一冊に盛り込みました。

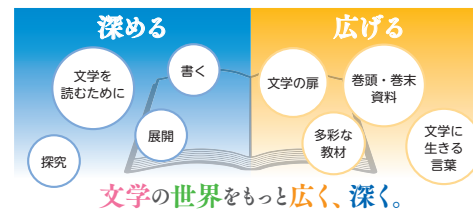
特色 1

心に響く近現代の文学作品
近代の名作から現代の新鮮な作品まで、長短合わせて16本の小説作品を厳選。さまざまな組み合わせ方ができるように、1学期に1本以上の定番教材を置きました。

生きた文学史が一望できる！

文学国語

文国704 A5判 454ページ



特色 5

興味が広がる付録・資料
読むとき、書くときに役立つ「文学に生きる言葉」や、「日本近代文学の作家たち」「世界文学地図」などの付録・資料を収録しました。

特色 4

知識が広がり、読解が深まる多彩なコラム
文学のさまざまな知識が身につく「文学の扉」「小説の語り手」「比喩と象徴」など、文学的文章を豊かに読むための視点を紹介する「文学を読むために」を設置しました。

特色 3

心を動かす表現力が身につく
書く活動に無理なく取り組めるようにしました。

特色 2

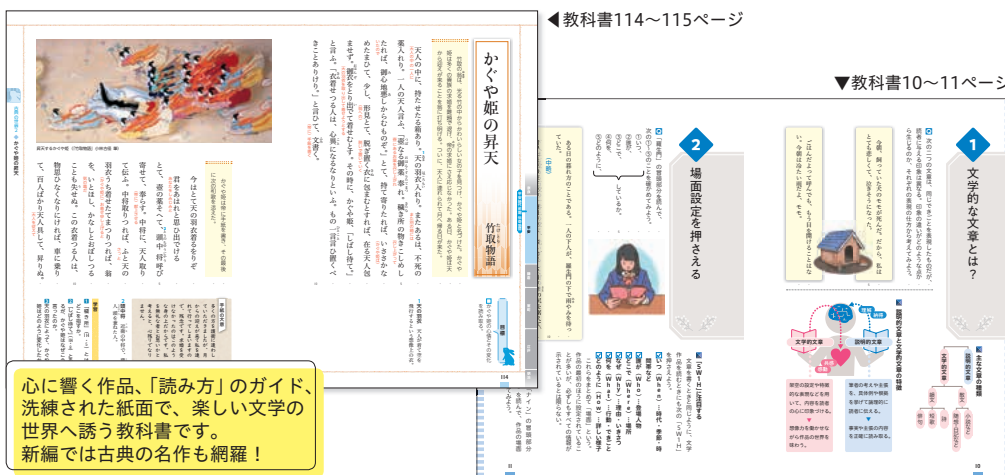
解釈・考えが深まる「展開」「探究」
教材と比べて読み、多様な解釈の可能性を知ることができる「展開」、自ら調べたり考えたりするための「探究」を設置しました。

特色 1

文学を読む楽しみが広がる教材群
「山月記」「こころ」「舞姫」などの定番教材から最新の作品まで、多様な時代や国の作品を満載。文学・文化・言語を考えるきっかけとなる随想・評論・戯曲も計13本収録しました。

教科書114～115ページ

教科書10～11ページ



教科書22～23ページ

教科書後見返し



充実した教材で、
古典を楽しく、主体的に学ぶ

精選 古典探究

古探708 A5判 406ページ

古文 71本

漢文 59本

現代文 9本

コラム 38本

付録 54p

古文、漢文ともに
充実の教材数！

古典の世界が一目でわかる



特色
5

両期的な付録が充実
漢文付録の「諸子百家関係図」や「詩文関係図」など、これまでにない資料を数多く掲載しました。

特色
4

理解をうながす多彩な図版
言葉では説明が難しい地理や人間関係などが一目でわかる図解資料や、作品の読解に資する美術作品を多数掲載。

特色
3

高校生の疑問に答えるコラム
「古文の窓」「漢文の窓」に加え、高校生の素朴な疑問に答え、興味を引き出すコラム「豆知識」を設置。読解に役立つ知識のほか、読書案内も盛り込みました。

特色
2

探究学習に取り組みやすい構成
「探究学習」を授業に取り入れやすくするための、探究課題を設置。また、読書案内やコラムでも、自主学習へのきっかけとなる話題を多数紹介しています。

特色
1

入試を見据えた読み比べ教材
教材の読解を深める「読み比べ」(読み比べ教材「視点」(鑑賞文等)を設置。近現代の文章を読んで課題に取り組み共通テストなどの新傾向入試にも対応できます。

授業でも実社会でも「使える」教科書、
さらにアップデート

国語表現

国表701 B5判 250ページ 2部構成

で使いやすい

問題数……→200問以上!!

実践的な問題を解きながら
学習を進められます。

読み物教材……→43本!!

生徒に読んでほしい、考えてほしい
テーマの文章を集めました。

使えるグラフ……→15本!!

小論文やプレゼンの
題材に!

B5判

国語表現



特色
5

メディアの活用方法を伝授
手紙や電話はもちろん、電子メールの使い方からSNSのマネー、インターネットによる情報収集まで。ネット社会を生きる生徒に伝えたい、正しいメディアとの付き合い方を伝授します。

特色
4

実社会で役立つ
自分PRの方法を指南
志望理由書や自己推薦書の書き方から、面接のコツやグループディスカッションの練習まで、進路に向けたあらゆる場面で役立つ自己表現の方法すべてを、この一冊にまとめました。

特色
3

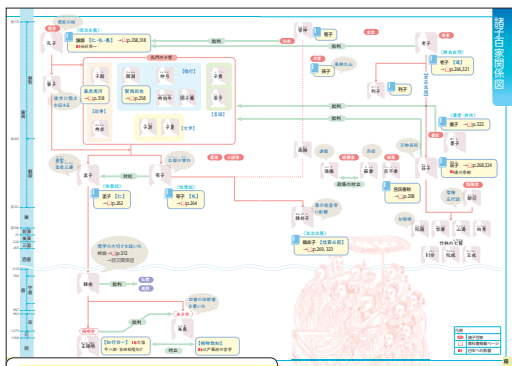
小論文の書き方完全マスター
小論文の書き方を基本から丁寧に解説。このステップなら誰でも小論文が書ける!さらに、課題文型・データ型・テーマ型など、多様な形式の小論文対策を網羅しました。

特色
2

ゲーム感覚で
楽しく言葉の基本を学ぶ
教科書全体をとおして、クイズ形式などの問題を解きながら言葉の基本や言語活動の基礎を学べる工夫をしました。教科書のステップに沿って学習を進めていくことで、実社会で「使える」国語力が着実に身につきます。

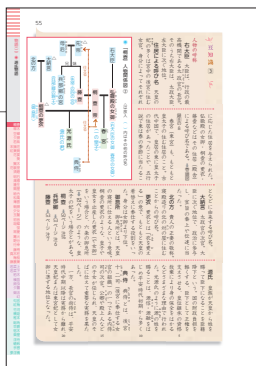
特色
1

表現力を培い、表現を楽しむ
姿勢を育む2部構成
書く力、話す・聞く力、言語運用力、情報活用力…。言葉の自由自在に駆使し、生き生きと表現する。そんな力を育むために、「第1部 表現力を培う」「第2部 表現を楽しむ」の2部構成としました。



▲教科書後見返し

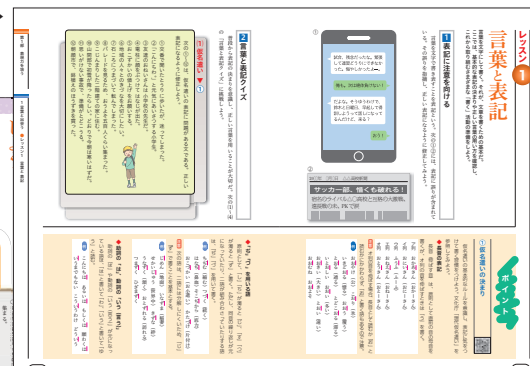
▼教科書366ページ



▲教科書55ページ

教科書12~13ページ▶

▼教科書176~177ページ



コミュニケーションの基礎となる言葉の
使い方を学び、さまざまな場面で活用
する。生きた表現力を培う教科書です。

豊富な教材と資料で、
古典を楽しく、主体的に学ぶ

古典探究 漢文編

古探707 A5判 204ページ

定番教材を網羅したほか、生徒の興味関心を
引き出す教材を多数掲載。

漢文 76 本

古文+現代文 10 本

コラム 18 本

付録 20p

難しく感じてしまいがちな漢文に
興味が持てる、疑問を解決する
コラムや資料がたくさん！



- 特色 4

つながりを把握して
漢文に親しむ

細かな章段で学ぶ思想教材、一つ一つ独立した漢詩は、登場人物や作者の関係がわかりづらいもの。そこで、人物の関わりや時代の流れが一目でわかる「曲線的な関係図」を掲載。また、中国古典の日本文化への影響をわかりやすく紹介した「漢文と日本文化」も掲載しました。
- 特色 3

高校生の疑問に答えるコラム

「漢文の窓」に加え、高校生の素朴な疑問に答え、興味を引き出すコラム「豆知識」を設置。読解に役立つ知識のほか、読書案内も盛り込みました。
- 特色 2

探究学習に
取り組みやすい構成

「探究学習」を授業に取り入れやすくなるための、探究課題を設置。また、読書案内やコラムでも、自主学習へのきっかけとなる話題を多数紹介しています。
- 特色 1

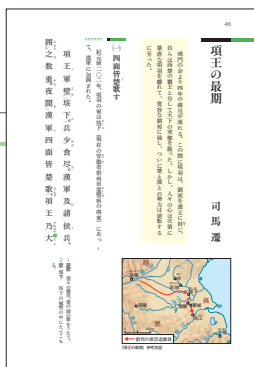
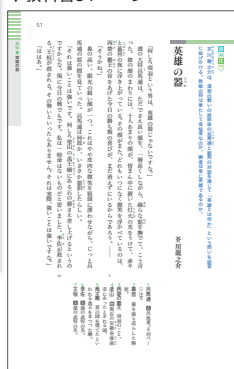
漢文の理解を深める
読み比べ教材

教材の読解を深める「読み比べ」(読み比べ教材)【視点】(鑑賞文等)を設置。近現代の文章を読んで課題に取り組み共通テストなどの新傾向入試にも対応できます。



▲教科書後見返し

▼教科書51ページ



▲教科書46ページ

豊富な教材と資料で、
古典を楽しく、主体的に学ぶ

古典探究 古文編

古探706 A5判 294ページ

定番教材を網羅したほか、生徒の興味関心を
引き出す教材を多数掲載。

古文 84 本

漢文+現代文 6 本

コラム 26 本

付録 36p

漢文や現代文の教材も掲載！
日本古典とのつながりを
実感できます。



- 特色 4

理解をうながす多彩な図版

言葉では説明が難しい人物関係や地理が一目でわかる図解資料や、作品の読解に資する美術作品などを多数掲載。
- 特色 3

高校生の疑問に答えるコラム

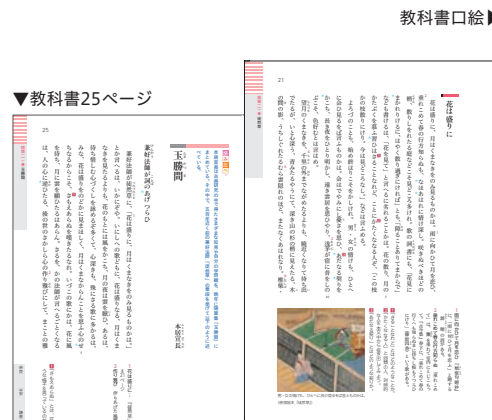
「古文の窓」に加え、高校生の素朴な疑問に答え、興味を引き出すコラム「豆知識」を設置。読解に役立つ知識のほか、読書案内も盛り込みました。
- 特色 2

探究学習に
取り組みやすい構成

「探究学習」を授業に取り入れやすくなるための、探究課題を設置。また、巻頭には探究の手立てを示した「古典を探究」を設け、自主学習にも取り組みやすい構成にしました。
- 特色 1

入試を見据えた読み比べ教材

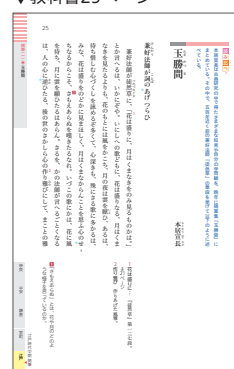
教材の読解を深める「読み比べ」(読み比べ教材)【視点】(鑑賞文等)を設置。近現代の文章を読んで課題に取り組み共通テストなどの新傾向入試にも対応できます。



▲教科書21ページ



▼教科書25ページ



探究活動にも役立つ図解資料や、興味を引き出す教材が充実。古文に親しむための仕掛けが詰まった教科書です。

「教師用指導書+デジタル教科書セット」のご案内

大修館の新しい教科書での授業を万全にサポート。

「教師用指導書」「付属DVD-ROM」「指導者用デジタル教科書」をセットでご用意。必修科目は「教師用教科書」「朱書」を含む4点セットです。

教師用指導書

「こう授業すればよい」が一目でわかる！
丁寧な学習指導案を、必要に応じて複数パターン提示。

学習指導案「文章の要点をつかむ」

単元	時数	目標	学習指導案
A案 4時間扱い	1	1. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 2. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 3. 「文」の構造を、対比しながら理解する。	1. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 2. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 3. 「文」の構造を、対比しながら理解する。
	2	1. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 2. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 3. 「文」の構造を、対比しながら理解する。	1. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 2. 「文」の構造を、対比しながら理解する。 3. 「文」の構造を、対比しながら理解する。

※ 紙面は必修科目をもとにしたサンプルです。

付属DVD-ROM

- ・原文データ
- ・現代語訳／品詞分解／
白文／書き下し文データ
- ・ワークシート
- ・板書例
- ・小テスト
- ・評価問題（標準・発展・実力）
- ・発問例全データ、語句・文法データ
- ・音声データ
- ・補助資料
- ・学習ノートデータ
- ・評価支援ツール
- ・大修館漢文エディタ オンライン など

小テスト

その時間の授業のまとめに。
基礎・基本を10分でチェックできる。

1. 漢字の読みかたを、次の漢字から選んで書きなさい。
2. 漢字の読みかたを、次の漢字から選んで書きなさい。
3. 漢字の読みかたを、次の漢字から選んで書きなさい。
4. 漢字の読みかたを、次の漢字から選んで書きなさい。

ワークシート

活動的な授業がサポートできる、
使いやすいワークシートが盛りだくさん。

教材配信サービスの案内

大修館クラウド

付属DVD収録のデータをダウンロードして
入手できる配信サービスをご用意しました。

評価問題

「発展」には大学入学共通テストに
対応した問題もご用意。

1. 「文」の構造を、対比しながら理解する。
2. 「文」の構造を、対比しながら理解する。
3. 「文」の構造を、対比しながら理解する。

必修科目はこちらもご用意！ 教師用教科書「朱書」

生徒の教科書と同じ体裁で、学習指導案、評価
の観点、設問の解答例などを朱記。別売可。

水の東西

山崎 隆正 著

1. 「文」の構造を、対比しながら理解する。
2. 「文」の構造を、対比しながら理解する。
3. 「文」の構造を、対比しながら理解する。

「話すこと・聞くこと」の評価もばっちり！
具体的な観点別評価規準例を提示。

板書例を豊富に掲載！ ビジュアル
でわかりやすい紙面。

■指導者用デジタル教科書「アプリ版／クラウド版」

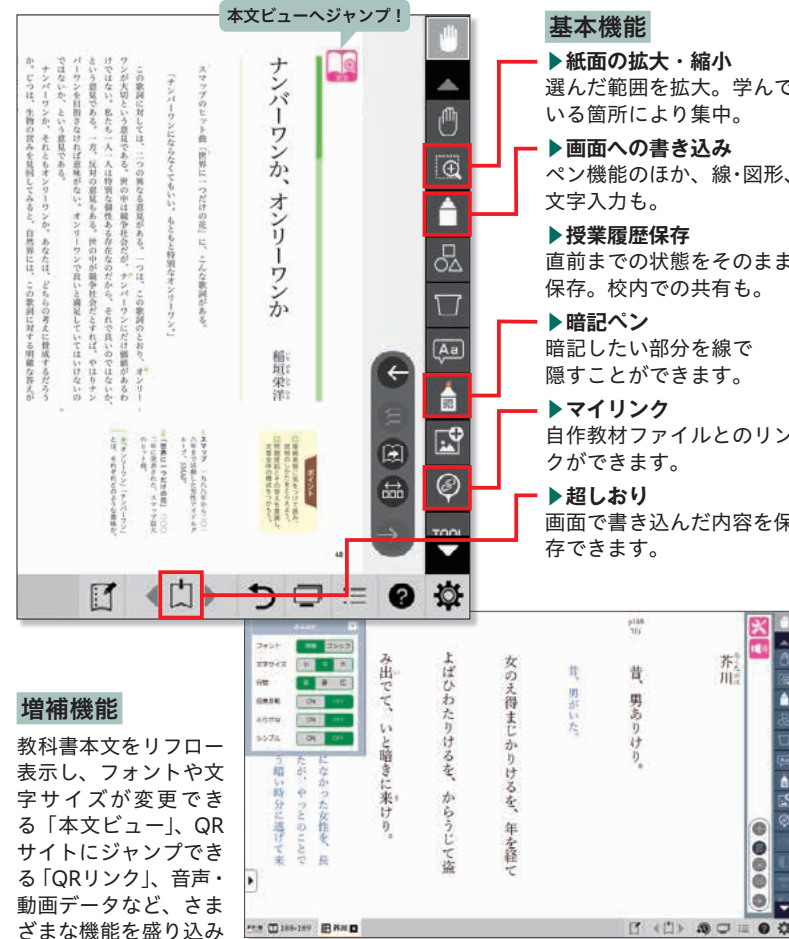
見てさわって使いやすい、新しいデジタル教科書を「ご用意しました。」

*1 必修科目には「指導者用デジタル教科書」を含まない、「教師用指導書セット」も「ご用意しています。」

*2 必修科目には、増補機能を充実させた「指導者用デジタル教科書（教材）」、「学習者用デジタル教科書＋教材」を別売にて「ご用意しています。」

基本機能

- ▶紙面の拡大・縮小
選んだ範囲を拡大。学んでいる箇所により集中。
- ▶画面への書き込み
ペン機能のほか、線・図形、文字入力も。
- ▶授業履歴保存
直前までの状態をそのまま保存。校内での共有も。
- ▶暗記ペン
暗記したい部分を線で隠すことができます。
- ▶マイリンク
自作教材ファイルとのリンクができます。
- ▶超しおり
画面で書き込んだ内容を保存できます。



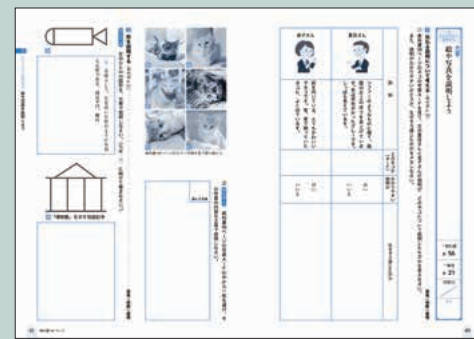
増補機能

教科書本文をリフロー表示し、フォントや文字サイズが変更できる「本文ビュー」、QRサイトにジャンプできる「QRリンク」、音声・動画データなど、さまざまな機能を盛り込みました。

▲多機能な「本文ビュー」で授業がスムーズに！

■学習ノート「別売」

教科書に完全準拠。読解から表現活動・探究活動まで、予習・復習だけでなく授業でも活用できる生徒用ノート。「論理国語」履修者向けに小説教材を提供する「学習ノート小説編」も「ご用意。」



最新情報は
こちら



BOOK REVIEW



いま、高校生に読んでほしい本

「『見えるひと』も実はそんなにちゃんと見えてはいないんだ！」(p.117)

目ではなく耳でアートをみるとは一体どういうことだろう。気鋭の書き手である川内有緒の新作は着眼点が素晴らしく、新鮮な驚きと刺激に満ちた一冊だ。著者の相手役である全盲の白鳥建二さんは年に何十回も美術館に通う美術鑑賞者である。絵画の前で傍らにいる人から説明を聞き、頭の中で作品を再現する。文字通り耳でアートを楽しんでいるのだ。この前代未聞の試みは当初、まったく受け入れられなかった。しかし彼の熱意はアートは「目で見るもの」という美術館

「耳」で感じるアート体験は目からウロコの連続だ。様々な境界を乗り越え、まったく新たな価値観が生まれる！

川内有緒『目が見えない白鳥さんとアートを见に行く』

(集英社インターナショナル、二〇二二年)

うちだ たけし
内田 剛
ブックジャーナリスト。約三〇年の書店員勤務を経て、二〇二〇年よりフリーに。NPO本屋大賞実行委員理事。

の常識を変えた。単なる視覚障害者のルポルタージュではなく、信念を貫くひとりの人間の生きざまが伝わってくる。

本書を読みながら既存の価値観が崩れ去り、眼前の景色が一変した。僕らはこれまでいかに「見ているようでも見ていなかった」のか。視覚ではなく脳の力に訴えかけなければならぬ。キャンパスに書いてある絵画を言語化することによって、眠っていた五感が研ぎ澄まされ、相手を思いやる気持ちが育ち、新たな「気づき」につながったのである。

物事の本質を捉え直し、様々な境界を乗り越えて、独自の鑑賞法が生み出される。いつの間にか「白鳥さん」と一緒に全国各地の美術館巡りをしていた。

本文のとあるページには、黒塗りで隠

された作品がある。その説明を文章で「聞いて」頭の中で想像する、という白鳥さんの絵画鑑賞を疑似体験する仕掛けだ。答えはカバー裏に印刷されている。造本も美麗で凝っており、紙の本の魅力を存分に味わえる点も特筆ものである。潜在的に持っていた障害に対する恐れ、自覚など、著者の心の葛藤と変化もまた身に迫る。一風変わったアート鑑賞の旅の最後に至るのは、過去から未来に向けて自分自身を見つめ直すこと。「時」には抗えないが「時」を宝物にすることはできる境地である。深いメッセージを噛みしめ豊かな余韻にも浸ることができ。読まれるほど、この世の霧が晴れ渡るような価値ある一冊の登場に心の底から拍手を送りたい。

詩の教室へようこそ

和合亮一

第六回 言葉を真ん中に置くようにして

＊言葉そのものを

国際芸術祭「あいち2022」が昨年の夏に開催となりました。

三年に一度の周期で開催されている愛知県を主体とした国内最大規模の国際芸術祭です。前回の名称は「あいちトリエンナーレ」。存じの方も多いのではないのでしょうか。今回、この芸術祭に出展作家として参加しませんが、と声をかけていただきました。

これまでも国内でのアートフェスティバルや文学館の企画展の展示などに参加させていただいたことはありました。だから全く経験がなかったというわけではなかったのですが、これほどの規模の芸術祭の参加については、文学の人間でよいのかという

驚きを禁じ得ませんでした。とまどい、悩んだ末に、「和合さんの詩の世界を形にしていく方法を、キュレーターやスタッフのみなさんと一緒にまずはあれこれ考えてみましょう」というお誘いを受けることにしたのでした。

展示スペースとして、美術館の横十二メートル、縦六メートルの巨大な壁面をいただけることになりました。呆気に取られてしまうような広さです。

まずは展示のアイデア出します。日頃の教冊の創作のノートに新しい一冊を加えて、発想をメモすることから始めました。全く違う畑を耕すつもりで、浮かんできたイメージを自由に書き連ね、定期的に開かれるオンライン上の打ち合わせの折に意見を出し合う、ということを重ねました。

福島県立福島北高等学校教諭。第一詩集にて、中原中也賞、第四詩集にて晩翠賞受賞。二〇一一年の東日本大震災で被災した際、Twitterで「詩の礫」を発表し話題に。詩集となり、フランスにて詩集賞受賞（日本人初）。二〇一九年、詩集『QQQ』で萩原朔太郎賞受賞。校歌、合唱曲作詞多数。

例えば、詩を板に記して上からたくさん吊るしていくとか、暗い室内に設置された電光掲示板に映し出された詩が光っては消えていくとか、巨大な和紙に手書きで記した文字を日替わりで展示していくとか…。

何回かこちらから企画を提案し、スタッフのみなさんからもアイデアをいただきました。しかし、斬新であろうとすればするほど、実は誰でも考えつくことかもしれない、という感想に帰着していくのでした。ここで、アートディレクターの片岡真実さん（現森美術館館長）のアドバイスがありました。

今回の芸術祭のテーマは「STILL ALIVE」。日本のみならず、世界各地で起きている震災やパンデミックを経

した。

験した後の、これからの暮らしのありかを、アートの力で見据えていきたい。奇抜さや実験的な見せ方に凝るのではなく、シンプルに、「何を見せるか」に的を絞るべきではないか…。和合さんがこれまで震災やコロナ禍をテーマに書いてきた言葉を様々に何かで飾るのではなく、言葉そのものを見せていく展示をするのはどうか。

東日本大震災から十数年の歳月となりましたが、ツイッターにずっと詩を書き続けてきました。月日が過ぎていくなかで、しだいに震災の内容のみならず、コロナ禍の日々への思いや、ロシア侵攻下のなかで作品を負けずに作り続けているウクライナのアーティストとの往復書簡なども、アップしてきました。「今回の芸術祭では、そもそもアートとは何かを探してみたい」と何度も会議で語った私に、片岡さんは、「今まで活動そのものがアートである」という助言もいただきました。和合さんの活動そのものを見せていきましょう…。と。

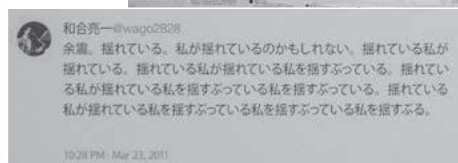
具体的には、二つの取り組みの計画がま

とまりました。

一つは、私の十数年分のツイートの詩を六〇〇篇に厳選し、画面上のデザインのままに印刷した六〇〇枚の長方形のシールを作成し、それを壁に規則的に貼りつけるという内容です。

そこには、ツイートの言葉だけでなく日時まではつきりと記されることになりました。一つ一つと壁面へと並べていくことで、一つ一つが日付と時間まで細かく記された記録として提示されていくことになる。それを見る側は、書かれた内容と同時に時間と歳月も把握していく。そうした過程をも含めて展示することで、受け手は、詩句を「読む」と同時に客観的に「見る」ことにもなっていくのではないだろうか…。と。

企画から一年後、実際に完成した展示を初めて眺めた折に、深く実感できました。歳月の多様さとボリュームを、整然と並べられたこれらのシールが、その全体で表そうとしている、と。びつしりと貼られた迫力を前にして、なるほど、まずは書き記したという事実そのものが、全体から伝わってくるのが第一なのだ、と気づかされま



それでも一つは、リアルというよりはオンラインということになるのでしょうか。ツイッター上で「#愛の礫」というハッシュタグ（#）を付した詩の投稿を呼びかけるイベントです。

過去のツイートの展示という「これまで」の時間へと向けられた企画に対して、書かれたばかりのリアルタイムの詩を広くたくさんの方々から集めるという、現在へと向けられたプラットフォームを設定する試みです（ちなみに「愛」は「愛知」の一文字をお借りしました）。それを展示会場に設置された大きなモニターで公開することになりました。不特定多数のフレッズが、そのままモニターにも、ツイッターのタイムライン上にも流れていくという仕組みです。手探り状態で始まりましたが、会期中に参加者がどんどん増えていき、最終日までに一万三千件の詩の投稿がありました。詩を書いたことのない方々の参加が、特に多く見受けられました。

宮沢賢治は「生活そのものが芸術だ」とよく語っていましたが、正にそれを思わせるような、とても親しみやすい作品と出会

えた印象があります。そうした日々の眩しさが次々にアップされたのです。

詩という敷居が、ふとしたきっかけにより、ぐっと低くなっていく。それがSNS上でも実現できるのだということが実感できました。詩を真ん中にしたコミュニケーションのありかを様々に探していきたい私にとって、大きな収穫になりました。

＊目線を上にして

二つの展示を会場で見えて、リアルに体験・体感して、最初に感じたのは、お客さんという第三者と同時に作品を見つめる、あるいは見上げるという不思議な感覚でした。

なるほど、私たちは「読む」という行為をするとき、上の方を見上げるということはありません。対象を前にして、水平から下のように目線を動かします。しかし、今回の展示の「読む」ならぬ「見る」という行為の場合、目線は水平あるいは上のほうを向くこととなります。そのようにして、観客の方々と共に自分の詩行を見つめていると、みなさんの熱心な視線と呼吸

とが、これまでに味わったことのない新鮮さと共に、まざまざと新しい輪郭を持つて深く伝わってくるようでした。

あらためて、言葉の受けとめ方というのは多様なのだと深く感じました。本と私、書物と自分という関係の形は、もちろん国語教師として常に大事にしたいところではありますが、正に、目線を変えてみれば、文字とは意味である前に形であり、模様であり、記号なのだと思わされました。そうしたものを無意識に受けとめながら、私たちは言葉のキャッチボールを重ねているんだなあと、シンプルに感動を覚えてしまいました。

ここで、先輩教師たちから教えられてきたことに行き着くのでした。いつも「板書がきちんとできなければ授業とは言えない」と熱く教えられてきましたが、それは、授業の中で目線を上にすることを生徒たちに求めるものだ、と。板書とは、教科書というテキストから客観的にものの見方・考え方を整理して、授業の流れを総覧できるものなのだと、これまでにない形で実感したのでした。

視線の動きと感受や思考のありかとは、実はとても親密なものだとわかりました。原点に立ち返って、しっかりとした板書のプランを立ててみよう。展示会場の人混みの中で、教室を思い浮かべながら、深くうなずいている私がありました。

＊言葉の球音を響かせて

言葉のキャッチボールということをめぐって、ご紹介したいコンクールがあります。「ふくしまを十七字で奏でよう」

です。(<https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/edu/syukaiyoku470.html>)



福島県教育庁主催の事業で、平成十四年からスタートし、今年で二十一年目を迎えます。これまで累計で七十三万組、一四六万人の参加がありました。家族あるいは友人とペアを組んで、十七文字のメッセージ（つまりは俳句形式です）を贈り合うという内容です。

「俳句」としてしようと、ぐっと敷居が高くなってしまいうので「十七文字」と呼び、広く募集されています（これもアイディアですね）。

小学生から中学生までが対象ですが、県内の数多くの小中学校が熱心に取り組んでいます。高校生たちは皆、これまでこのコンクールに参加してきた、言わばOB・OGです。私は昨年、このコンクールの審査をさせていただきました。その中から、親子のユニークな作品をいくつか、ご紹介します。

さんかんぴ まだかまだかと ふりかえる

郡山市立芳賀小学校 二年 佐藤あけひ（子）

後ろ向く 我が娘に合図 前見てと

佐藤愛子（母）

「まだ子ども」「もう大人だし」使い分け

須賀川市立第三中学校 二年 斉藤希（子）

都合良く 甘えていばる お年頃

斉藤美紀子（母）

母の日に スマホ片手に キッチンへ

郡山市立守山中学校 一年 上遠野琴羽（子）

調理法 ググった履歴 見ないふり

上遠野葉子（母）

詩の作品大募集！

本連載では、高校生の詩の作品を募集いたします。応募作品の中から和合先生に選んでいただいたものを誌面にてご紹介していきます。奮って応募ください！（募集要項は64頁）

「ぞ」「なむ」「こそ」の違い

紫式部にファンレターを書こう⑧

大倉 浩
筑波大学教授

前回から引き続き、「係り結び」について考えます。今回は、強調と言われる「ぞ」「なむ」「こそ」の違いを考えてみます。

係り	はたらき	結び	例
ぞ	強調	連体形	都にぞ、行きける。
なむ	強調		都になむ、行きける。
や(やは)	疑問・反語		都にや、行きける。
か(かは)	疑問・反語		いづこにか、行きける。
こそ	強調	已然形	都にこそ、行きけれ。

この三語について、「こそ」が最も強調の勢いが強く、次いで「ぞ」、そして「なむ」が一番弱いというようなランク付けをしている古語辞典や副読本もあります。話し手(書き手)が、聞き手(読み手)に特に伝えたいこと(右表の例文で言えば「都に」の部分)を

際立たせるのが強調だとすると、それに強調の度合いがあるのでしょうか？ 強調に度合いがあるとしても、前後の文脈が大きく関わり、助詞の違いだけでは説明できないと思います。それよりもこの三語については、由来や用いられる時期・ジャンルに違いがあることを、まずは確認すべきです。

最初に「ぞ」ですが、指示詞「其」に由来するという説があり、奈良時代の『万葉集』などでは、清音の「そ」としても用いられています。「それ、それだよ！」と指し示す働きが強調の助詞に変化したと想定するわけです。夕暮れの時分を「たそがれ時」とも言いますが、これは、周りが暗くて顔がよく見えない「誰そ彼」(誰だあの人は?)の時分、というのが語源で、清音の「そ」が残っている例です。平安時代には濁音「ぞ」となり、和歌から散文まで、ジャンルを問わず

用いられました。鎌倉時代以降でも、前回の疑問の「か」「や」と同じく文末に移って終助詞化し、現代日本語でも、

今後のことは君に頼んだぞ。

というように、話し手から聞き手への強い働きかけの意味を残している、寿命の長い助詞です。

それに対して「なむ」は、平安時代の成立で、奈良時代には「なも」のかたちで官能など散々文獻に用例があるものの、和歌では、

いつはなも(奈毛) 恋ひずありとはあらねども
うたてこのころ恋ししげしも (万葉、二八七七)

という一例があるだけです。語源も未詳です。平安時代に「なむ」となりますが、やはり会話文など散文にしか用いられず、和歌には用いられない係助詞でした。さらに鎌倉時代以降は、「ぞ」のように終助詞化することもなく(既に希望の終助詞「なむ」が存在していました)、衰退してしまします。使われた時期やジャンルが限定的な係助詞なのです。

そして「こそ」ですが、こちらは指示詞「此其」が語源だという説があり、奈良時代から和歌にも散文にも用いられている点でも「ぞ」と似ていますが、

難波人葦火焚く屋の煤してあれど 己が妻こそ
(許増) 常めづらしき (万葉、二六五一)

のように、古くは形容詞の結びが已然形ではなく連体形になる例があり、こそ―已然形という「係り結び」の完成は平安時代であったことがわかります。また、「こそ」だけがなぜ已然形の結びとなるのかについても、残念ながら定説がありません。ただし奈良時代には、活用語の已然形が、接続助詞「ど・ども」などが無くてもそのまま逆接的な意味を表す働きがあったこと、「こそ」にも「::は::だけれども」という逆接の強調の含意が多いことから、「こそ」の係りと已然形の結びという関係が定着したのではないかと考えられています。この係り結びの関係は室町末期まで維持されていて、その後、已然形結びは解消しましたが、現代日本語でも副助詞「こそ」として残っています。

古くからの「ぞ」と、新しい話し言葉の「なむ」、少くせのある「こそ」、三種の係助詞がちょうど平安時代に共存していたわけです。今回は、この違いを踏まえて、改めて「強調」という働きを文章の中で考えてみましょう。



古典文法に関するご質問をお寄せください。

→大修館 HP 内「WEB 国語教室」からもお送りいただけます。

<https://www.taishukan.co.jp/kokugo/media/>

「アジづくし定食」はアジづくめ？

たたきにフライに南蛮漬け、なめろうも付いた「アジづくし定食」、刺身に酢味噌和え、ゲソ揚げ、塩辛の「イカづくし御膳」——とにかく大好きなあれを思う存分食べたい！と矢も盾もたまらなくなったら、「××づくし」で検索してみてもいいか？ お気に入りの食材を様々に調理したメニューのあれこれがヒットしますよ。

*

「尽くし」は、「(名詞に付いて)同じ類のものをすべて並べ上げる意を表す(『明鏡国語辞典』)」ときに使われます。諸国の名を口調よく列挙したのが「国尽くし」。相撲甚句「花尽くし」は、〆正月寿ぐ福寿草／二月に咲くのが梅の花／三月桜や 四月藤……と、花の名を次々に挙げていきます。ここである疑問が浮かびます。「アジづくし定

食」は、アジと同類のものを並べ上げているわけではないのではということに。マアジ、ムロアジ、シマアジ……のように、様々な種類を提供するのであれば、「づくし」とは言えないはずです。

*

見た目や味付けは違ってても、使っているアジの種類は同じなら、「(名詞などに付いて)全体がそればかりであることを表す(同)」という意味の「づくめ」が適切ということになります。

「づくめ」は平たく言えば「何から何まで××ばかり」。ダース・ベイダーは全身黒一色の「黒づくめ」のコスチュームに身を包んでいます。髪の毛の結び方から男女交際まで、がんばりがらめに縛りつける「規則づくめ」の生活指導が問題になったのは記憶に新しいところです。元手はいらない、

楽しんでもうかるなどという「結構づくめ」のアルバイトの誘いには安易に乗ってはいけません。

「そればかり〆づくめ」と、「並べ上げる〆づくし」は、混同されやすい言葉です。普通でないことばかり起こるのは「異例づくし」でなく「異例づくめ」、「金もない仕事もない友達もない」とないものを数えて嘆くのは「ないないづくめ」でなく「ないないづくし」です。

*

つまり、前菜も主菜もお椀^{わん}も何から何までアジを堪能できるのは「アジづくめ定食」です。ただ、あまりおいしそうに感じられないのはなぜでしょう。「そればかり」の意が強調されすぎて変化に乏しいイメージがするからかもしれません。実際、お品書きで「づくめ」と名付けている例はほとんど見かけません。手を替え品を替え工夫を凝らした調理法がメニューに並べ上げられていると解釈すれば、「アジづくし定食」の表現もあながち間違いないとは言えない気がします。料理名に関しては、「づくし」の語釈に検討の余地がありそうです。

*

関根 健一

●日本新聞協会用語専門委員。元読売新聞東京本社編集委員。大東文化大学非常勤講師。著書に『なぜなに日本語』(三省堂)、『ちびまる子ちゃんの敬語教室』(集英社)、『文章がフツッ!にうまくなる!』(ついでのことば)、『品格語辞典』(大修館書店)など。『明鏡国語辞典 第三版』編集・執筆協力者。

ところで、漢字で書けばどちらも「尽くし」「尽くめ」ですが、標準的な仮名遣いは、「づくし」「づくめ」と異なります。「現代仮名遣い」(内閣告示)には、「二語の連合によって生じた『づ』」の例に「こころづくし」が挙がっています。「づくし」には「ありったけのものを出し切ってしまう」という「尽くす」の意味が残っているのです。

*

一方、「づくめ」は「二語に分解しにくいものは『ず』を用いて書く」の規定に該当します。「尽くす」との関係が薄れているわけです。本来「疎む」に由来し、歴史的仮名遣いで慣用的に「づ」と表記してきただけという説(大辞林 第四版、松村明編、三省堂)もあります。

参考:「現代仮名遣い」(文化庁ウェブサイト)



青山あり！

中国祠墓紀行

[WEB国語教室]運動

第八回

朱然墓

(安徽省馬鞍山市)

文と写真

平井 徹

慶應義塾大学講師(中国文学)



◆DATA

人物：朱然（182～249）。三国呉の武将。『三国志』巻56に伝がある。

墓所：安徽省馬鞍山市雨山区朱然路。馬鞍山市は江蘇省の省都南京市から南西に50km行ったところにある。

アクセス：東京から▶→3.5h 南京▶→1.5h 馬鞍山 南京禄口空港から南京市街に向かわず、高速道路で馬鞍山に直行したほうが便利。

あわせて行きたい：烏江霸王祠（安徽省和县）、太白樓（安徽省馬鞍山市）、李白墓（安徽省当塗県）

朱然（一八二～二四九）。三国時代、呉の孫権に仕えた武将。字は義封。呉の創業を支えた豪族朱治（一五六～二二四）の甥（姉の子）で、十三歳で叔父の養嗣子に迎えられた。若年の頃、後に呉の初代皇帝となる孫権と机を並べて勉強した仲で、生涯強い連帯感で結ばれるに至った。十九歳で官に就いて以来順調に地歩を築き、徐々に呉軍の中核を担うようになり、数々の勲功を立てた。その中でも印象的な活躍は、蜀軍との戦いで敵將関羽を捕虜にしたこと（二一九）と、それに続く夷陵の戦い（二二二）で、別動隊の将として劉備の退路を断ち、大捷に貢献したことであろう（ちなみに、小説『三国志演義』第八十四回では、蜀の趙雲の槍に一撃されているが、フィクションである）。創業世代の功臣

の中で最後まで生存し、武官の最高位である左大司馬、右軍師まで陞りつめた。晩年は病がちで、その死を孫権は大いに悼んだという。

『三国志』では知る人ぞ知る、いぶし銀のような人物であるが、「朱然墓」の考古学的価値は、同時代随一である。一九八四年六月、長江下流の南岸、安徽省馬鞍山市街の雨山（海拔八十二メートル）南側一キロの地点にある小高い丘で、紡績会社の倉庫を建てていた際に発見された。規模は、長さ八・七メートル、幅三・五四メートルとわりと小ぶりであるが、墓道や墓室を備えた遺構や木棺が現存している。一九八七年には、漢代の建築を模した「三国朱然文物陳列館」（のちに「朱然家族墓地博物館」に改称）が併設

された。

一九九六年九月、施設拡張工事の過程で、朱然墓の西南三十メートルの位置に、新たに四つの墓が見つかった。遺構が残っていたのは一基のみであったが、これらは朱然の家族墓地であることが確認された。二〇〇一年、「全国重点文物保护单位」に認定。筆者は二〇〇六、〇八、一九年の三回訪れているが、すぐ脇にこぢんまりした「朱然文化広場」ができ、朱然の像が立っていたものの、観光地化の波に洗われず、一貫しておだやかで静かな一角を保っていた。

注目すべきは、墓そのものよりも、一四〇点余りの文物であろう。殊に多くの漆器の出土は、この呉越一帯の文化を特徴づけるものであり、豊富とは言いがたい三国時代の考古学、美術史の空隙を埋める成果を挙げている。私の眼にとまったのは、「季札挂劍図漆盤」。直径二十五センチほ

どの漆の皿に、『史記』呉太伯世家に載せる、春秋時代の呉の公子季札の故事が描かれている。劉向『新序』や『蒙求』にも見える有名な逸話だが、この地域における説話の流传を考えると興味は尽きない。「木刺」は十四枚出土している。長さ二十四・八センチ、幅三・四センチ、厚さ〇・六センチで、中国最古の名刺とされている。表面には楷書で「弟子朱然再拜 問起居 字義封」などと墨書してある。一九九六年に出土した「青瓷羊」は、長さ三十三センチ、高さ二十一センチの青緑色の磁器製の羊である。蠟燭を立てるための生活用品として用いられたそうだが、この時代、器物をしはしば動物で象る作法が採られ、技術が大いに発展したという（実物は南京博物院で展示されていた）。あまりに可愛いので、等身大のレプリカを購入し、割れないように苦労して持ち帰ったことが思い出となっている。



▲朱然墓全景（2008年撮影）



▲墓室と木棺（2008年撮影）



▲朱然の木刺（2019年撮影）



▲青瓷羊（2019年撮影）

六草いちか 著

すべてのナゾがこれで解けた!!

鷗外「舞姫」徹底解説

四六判・並製・三四〇ページ
定価 二八六〇円(税込)

評者 加納弘一

森鷗外「舞姫」のヒロイン、エリスのモデルを特定し、その写真も発見して一躍脚光を浴びた六草いちか氏により、「舞姫」作品そのものを徹底的に解明した快著が刊行された。

「舞姫」探究の最新成果として、エリスのモデル、エリーゼ・ヴィーゲルトの日本行きを裏付ける資料等、いくつもの新発見が披露されて興味深い。また、ベルリン在住30年以上の作家ならではの、表現レベルから創作の裏側の事実に至るまでの緻密な精査を通して本文記述の真の

意味が浮かび上がってくるところには無類の面白さがある。

第4章「舞姫」ルーベ」では、豊太郎はどのような経路でエリスと出会ったか、また一体どの教会で出会ったのか、それは何時頃だったのか等、当時の情報を博捜し、作品世界を再現していく。その手際は実に鮮やかだ。ゲーム感覚で楽しむことができ、授業のよい参考にもなるだろう。「舞姫」という文学作品の底深さを改めて思い知らせてくれる、高校国語教師はぜひとも読みたい一冊である。

瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明 編著

「例解」現代レトリック事典

A5判・上製函入・六二二ページ
定価 二八八〇円(税込)

評者 浅野 俊

国民を鼓舞し戦争の不当性を世界に訴えるゼレンスキー大統領のスピーチ、かつての不人気を払拭した元首相の弔辞、ますます高度化する振り込め詐欺の手口。良くも悪くもことばの偉力を見せつける実例には事欠かない。その偉力を支えているのがレトリック、いわばことばの調理法。食材が生きるかどうかは料理人の腕次第だが、ことばが効果的に伝わるかどうかはレトリック次第。

本事典では、村上春樹から「こち亀」まで、生気あふれる実例

の中に多彩なレトリック技法を探り、それらをメタファー・擬人法など72のカテゴリーに整理し、それが及ぼす効果を認知科学の知見も駆使して解明。考察の対象はことばにとどまらず漫画、絵画、音楽にも及ぶ。

「ことばは世界を認識するための必須の手立て」であり「学力の基盤は言語力」という認識が広まる今、その能力育成を担う国語の先生方にとって、日本語の可能性を広げる本書は、頼りがいがあり噛み応えもある示唆に富んだ伴侶となろう。

笹原宏之 編著

なぞり書きで脳を活性化

画数が夥しい漢字121

B5変型判・並製・二二八ページ
定価 一九八〇円

評者 御神渡歩

薔薇と憂鬱。手本を見ることなく書くことができれば、尊敬のまなざしを向けられること間違いなしの漢字の代表格だろう。海外で「鬱」を書いて見せたところ、現地の人が目を見開いたという話もWEB上にある。ことほど左様に「画数の多い漢字」に関する人々の興味関心は高い。本書は収録漢字5万字を誇る大漢和辞典より、最大画数64画から32画までの121字を抽出。語釈はもちろん、編著者である笹原宏之先生が、最新の研究成果や調査に基づく漢字の由

来をコラム「ささひろ・ポイント」でわかりやすく解説しており、漢字の奥深い世界へ誘ってくれる。何よりなぞり書き用のマスが用意され、画数が「夥しい」漢字を実際に書くことができる。漢字を「知る・読む」だけでなく「書く」楽しみも味わえる一冊となっている。

ちなみに「鬱」は常用漢字最大画数の29画。本書掲載の漢字はどれも「鬱」を超える画数を持つ。人前で書いた時の反応を想像しながら書きすれば、脳も活性化するだろう。

伊藤実歩子 編著

変動する総合・探究学習

欧米と日本 歴史と現在

A5判・並製・二三四ページ
定価 二四二〇円(税込)

評者 荒木 信

新課程において存在感を増す総合・探究学習。高校においても「総合的な学習の時間」が「総合的な探究の時間」と名称を変え、さらなる充実がはかられている。本書はそのような総合・探究学習について、日本と海外の歴史と現状を検討・分析したものである。

本書は大きく二部構成になっており、第一部では、総合・探究学習の成り立ちを、二〇世紀初頭以降のアメリカー・ドイッ・日本の歴史をたどることで検討していく。続く第二部では、欧

米八か国の総合・探究学習の現状を、具体的な実践事例とあわせて紹介している。

総合・探究的な学習の入試への導入や、民間企業との連携など、各国の取り組みに刺激を受ける一方で、教師と生徒との関係や教科間の連携、授業の質の確保など、どの国も悩みを抱えていることに気づかされる。

現在と過去、日本と世界を俯瞰することをおして、あらためて「総合・探究学習とは何か」ということを考えさせる一冊である。

2022.9～2023.1

国語の

News & Topics

国語・教育に関わる情報と
授業に役立つ話題を集めました。

国語に関する世論調査

文化庁は9月30日、令和3年度の「国語に関する世論調査」の結果を公表した。今回の調査では、情報入力機器やローマ字表記に関する意識も調査された。

「情報機器の普及で言葉や言葉の使い方が影響を受けると思うか」の問いには、90.6%が「受けると思う」と答えた。その影響として「手で字を書くことが減る(89.4%)」「漢字を手で正確に書く力が衰える(89.0%)」などの答えが多かった。

情報機器における入力方法でローマ字入

教育行政関係

- 文科省「全国学生調査」結果公表(10/21)
- 大学入試センター、「情報」含む令和7年度以降用の試作問題を公表(11/9)
- 都教委、都立高入試に「スピーキングテスト」実施(11/27)
- 文科省、「生徒指導提要」改訂(12/6)
- 中教審「『令和の日本型学校教育』を担う教師の育成・採用・研修等の在り方について」答申(12/19)
- 令和5年度大学入学共通テスト実施(1/14,15)

国語関係・時事

- 「国語に関する世論調査」結果公表(9/30)
- ノーベル文学賞はアニー・エルノー氏(10/7)
- AI文章生成ツールを使った小説の文学賞、結果発表(10/31)
- ユネスコ無形文化遺産に「風流踊り」など登録(11/30)
- 「今年の漢字」は「戦」(12/12)
- 芥川賞は『この世の喜びよ』(井戸川射子)、『荒地の家族』(佐藤厚志)、直木賞は『地図と拳』(小川哲)、『しろがねの葉』(千早茜)が受賞。(1/19)
- 永井路子死去。97歳(1/27)

力を使用する割合は54.7%だった。また、ローマ字表記方法に複数の種類がある場合(「Aich」)と「Ait」など)、自分で書く際の表記は単語ごとに訓令式、ヘボン式を用いる割合がまちまちだった。

大学入学共通テストの試作問題公表

大学入試センターは、11月9日、令和7年度入試から実施される大学入学共通テストの試作問題を公表した。令和7年度入試からは、新教科「情報」が追加されるなど、教科・科目が再編され(6教科30科目)7

教科21科目へ)試験時間などにも変更がある。

「全国学生調査」結果公表

大学生対象の全国的な調査である「全国学生調査」の第二回試行調査の結果が10月21日に公表された。

この調査は中教審の提言を受け、全国共通の質問項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学の教育改善などに活用することを目的としている。具体的には、大学での学びをどう思うか、生活時間はどうか、オンライン授業の状況などの設問が設定されていた。

今回は、大学、短大など739校を対象とし、11万9372の有効回答(対象者の12.2%)を得た。

AI小説生成ツール使用作品の文学賞

10月31日、「第一回AIのべりすと文学賞」が発表された。AI小説を作成するためのツール(数行の文章を入力することで、小説を自動作成する)を用いて作成した小説の文学賞は初めて。

「生徒指導提要」の改訂

文科省は12月6日、12年ぶりに生徒指導に関する学校・教職員向けの基本書である「生徒指導提要」を改訂した。生徒指導の基本的な考え方や取り組みの方向性等を再整理し、今日的な課題に対応するための改訂という。

令和5年度大学入学共通テスト実施

2023年1月14・15日の二日間、大学入学共通テストが実施された。

研究会・展覧会だより

日本方言研究会 第116回研究発表会

【日時】2023年5月19日(金)
【場所】青山学院大学(対面)

日本語学会2023年度春季大会

【日時】2023年5月20日(土)・21日(日)
【場所】青山学院大学(対面)

全国大学国語教育学会 第144回島根大会

【日時】2023年5月27日(土)・28日(日)

【場所】島根大学松江キャンパス(対面)

全国漢文教育学会 第38回大会

【日時】2023年6月3日(土)・4日(日)
【場所】横浜国立大学(対面)

創立150年記念特集 王羲之と蘭亭序

【会期】(開催中)～2023年4月23日(日)
【場所】東京国立博物館・台東区立書道博物館

先日、高校サッカー大阪大会決勝を観戦しました。延長戦に入し、終了の笛が鳴るまで頻繁に好守が入れ替わる大接戦でした。その試合中、一方のチームの監督が「パラパラしよう」と選手に声掛けしていました。サッカーの練習に速読脳トレを取り入れている学校で、パラパラと本をめくるように常に試合中まわりを見て情報を頭に入れ集中力を高めることを指します。スポーツでは瞬時の状況判断が求められます。それらを高めるため速読脳トレを導入しているプロ選手や部活動が多いことを知りました。

最近の体力面の衰えを補うため、私も速読脳トレに取り組み、情報処理能力を少しでも高め、延長戦目指して抗っていきたいと思います。

関西支店 福士俊浩



大修館出版販売に入社してはや数か月、商品の知識を勉強して少しでも先生方のお役に立てるようにと研鑽に励む日々です。そんな若輩者の私に学校の先生方は様々な情報を教えてくださいます。仕事内容だけではなく、最新時事や地域のこと、スポーツニュース、はたまたご当地名物まで。日々、多様なニュースにアンテナを伸ばして情報を収集していらっしゃるのだと感服いたしました。私も新しい仕事を覚えるのは勿論こと、積極的に世間目に向けてアンテナを伸ばし、日々勉強して一人前の営業マンになるべく、精進して参りたいと思います。

東北支店 鈴木智大



家の近くに、約六五〇本の梅の木のある公園があります。小誌の編集が始まったころにつばみがほころび始め、校了が近づいた今、まさに満開を迎えています。

一年前、転職を機に現在の住所に引っ越すまで、じつくりと梅を眺める機会とはほとんどありませんでした。どちらかというと桜に比べて地味な印象をもっていた私は、紅、ピンク、白と色とりどりだけでなく、さまざまな品種によって花びらの形や数、香りまでもが異なることに驚かされました。そして何度も通ううちに、その違いやその中に自分のお気に入りの木を見つける楽しさに、すっかり取りつかれてしまいました。

さて、新学期が始まり、これから先生方が新しい教科書で色とりどりの授業を展開されることと思います。今号では、編集部に届いた新課程の授業についてのお困りの声を取り上げ、それぞれに対する授業実践案をご紹介します。新学期の授業づくりの一助にしたいだけだと幸いです。(明)

詩の作品 大募集!

詩人の和合亮一先生による連載「詩の教室へようこそ」では、高校生による詩の創作作品を募集いたします。お寄せいただいた作品は、和合先生に選んでいただき、優れたものを連載の中でご紹介いたします。作品が掲載された方には、大修館オリジナルグッズをプレゼント!

下のQRコードから奮って応募ください。郵送も可。



国語教室 第119号
2023年4月15日発行

国語教室編集室
鈴木 一行
広研印刷株式会社
株式会社 大修館書店
〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1
電話 03(3868)2651(販売部) 03(3868)2290(編集部)

出版情報 <https://www.taishukan.co.jp/>